教会教育

昭和二十八年八月十日第三種郵便物認可
昭和三十六年十二月一日発行　毎月一日発行　第九巻第十二号



12

1961

1961 **12** 目　次





聖　家　族　　エル・グレコ（1547〜1614）

今年もやがて、それぞれにキリストの降誕を迎えるのであろう。そして新しい信徒の群が各個教会で受入れられるであろう。日本中でこの日にキリスト者となる人々の数はどの位であろうか。主のひざ元に座して共に神を讃美する兄弟姉妹がふえることは大変にうれしい。しかし一方、私たちが忘れてならないことは、かつてクリスチャンとなったが、今では教会との関係を断ってしまった人たちのことである。元クリスチャン！こんな名前があるはずがない。しかし現実には、数多く存在している。何故だろうか日本におけるキリスト教は、これでよいのだろうか。今日生れた信者がすくすくと育って立派な大人になるためにキリスト教教育は何をしなければならないだろうか？　ともに考えたい。

ている(ヘブル一・三)。しかし、その「言」が、現実に肉をとり、人間となって、この世に来られたことは、全く他に類のない異常な出来事であり、驚異中の驚異である。神と世界とは二つの異なる存在である。天の地と異なるように、東と西と相隔てているように、神と世界とは相異なり、相隔てる存在である。しかるに、「神の言」が肉体となってこの世に来り、人間の中に宿ったのである。私たちはこの神の驚くべき出来事に馴れてしまって、不思議を不思議と感じない状態になっている。私たちの魂はこの出来事の前に眠りつづけている。クリスマスを迎える私たちの第一の準備は、私たちが眠りから目ざめ、「きょう、ダビデの町にあなたがたのために、救主がお生れになった」という出来事の意味を深く悟ることである。その結果、驚きの眼を開き、喜びと感謝にあふれることである。

キリストがこられたのは、すべての人のところに来られたのである。この世のいかなる人も、キリストから除外されていない。殊に世に取り残され、見捨てられた人、友のない人、寡婦と孤児、病床にある人、苦悩の中に泣く人、貧乏のため生活に困っている人、無知のため人から嘲られている人、孤独の人、悲しみの人、これら多くの人々にキリストは同情して、それらの人々の所までおりて来られたのである。そして彼らをみもとに招かれているのである。キリストの同情と愛とからもれる人、キリストの招きとかえりみの対象とならない人は、この世には一人もない。彼らはみなキリストの最も愛しておられる人々であって、彼らのために最善をささげ、生命をも捨てられるのがキリストの愛である。神の愛が、キリストにおいて具体化し、肉をとり人間となってこの世に来り、私たちの間に宿るに至ったのである。これがクリスマスの福音であって、信じる者は一人の例外もなく、皆救われて永遠の生命を与えられるのである。私たちは《言いつくせない賜物のゆえに、神に感謝せざるを得ない》(Ⅱコリント九・一五)。

しかし、ただ感謝するだけでは足りない。私たちはキリストの後に従う者として、自ら小さな受肉者になり、キリストと共に社会の中にはいり込み、苦しむ者と共に苦しまねばならない。キリストの受肉は、観念ではなく、具体的事実である。私たちも、口先だけで人を愛するのではなく、「行いと真実とをもって愛し合い」(Ⅰヨハネ三・一八)、キリストにならい、愛の実践とならねばならない。この実践により初めて、私たちはクリスマスの恵みにあずかり得るのである。

☆

この受肉者キリストに、栄光が輝いていた。ヨハネ伝の記者は《その栄光を見た》という。そして《それは、父のひとり子としての栄光であって、めぐみとまこととに満ちていた》という。このキリストの栄光を証しするために書か

キリストの栄光

山谷省吾

《そして言は肉体となり、わたしたちのうちに宿った。わたしたちは、その栄光を見た。それは父のひとり子としての栄光であって、めぐみとまことに満ちていた》
ヨハネ一・一四。

クリスマスの使信は、ルカ伝二・一一に《きょうダビデの町に、あなたのために救主がお生れになった》という言葉で、美事に要約されている。望みのない暗いこの世界の中に、よりどころなく生きている私たち人間のために、今日、救主キリストがお生れになったというのが、私たちに告げられたクリスマスの「喜びの音づれ」である。この喜びの音ずれを聞いて、受け入れ、喜びと感謝とに満たされ、新たに生きる力を与えられ、神にむかって讃美をささげるのが、キリスト者である。

ルカ伝で記されているこのクリスマスの使信は、ヨハネ伝では、上に引用した言葉をもって、言い表わされている。初めから神と共にあり、自ら神であり、世界の創造にあずかられた「神の言」であるキリストは、ついに「肉体となり」。私たちと同様な人間となってこの世界に来り、そして私たちの間に宿られたというのである。この異常な驚くべき出来事は、父なる神の愛の働きである。神の愛が、キリストの受肉を来らせた唯一の源である。《神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さった》(ヨハネ三・一六)のである。このキリストの誕生に示されている神の愛、私たちに対して示された神の愛の呼びかけに呼応して、それを信じ受け入れる者が、救われるのである。その身分や境遇や才能や、その他地上のいっさいの条件を無視して、信じる凡ての人を救いに入れ、生命を与えられるのである。これがクリスマスの福音である。

この世と「神の言」とは本来、無関係ではなかった。この世は「言」によって造られ、さらにその存在を保ちつづけ

なぜ信者が脱落するか

私は一〇の理由を数えた

島村亀鶴

十年前に調査した日本基督教協議会の、「日本伝道の基本方策」報告書によると、日本の六十箇の大学に在学中の男女学生一六三二名（内キリスト者学生六六三名を含む）に対し「キリスト教の何処が、きらいか」とのアンケートを出したところ、つぎのように答えている。

1、非科学的（教義の非科学性）
2、強制的（教義を押しつけ教会に入ると束縛される）
3、偽善的（言行不一致、他人に厳しく自己にルーズ）
4、形式的（宣伝多く、礼拝内容か形式的）
5、非現実的（実現不可能の理想で社会的行動なし）
6、無解答
7、わからない

以上であるが、1は九％、2は六％、3は一一％、4は九％、5は一四％、6は約半数の四二・五％、7は六％で（以下畧）あった。

これでみると、キリスト教が非科学的、強制的、偽善的、形式的、非現実的と思われていることがわかる。

「なぜ元クリスチャンが多くなるか」との本誌の質問に対し幾分以上と重複するところはあろうが、私はその答として、左の十ケ条を思いだすまゝに、書いておく。

㈠　信者のアフター・ケヤーをしないからだ。

洗礼を授けるまでは、こんせつていねいにしておいて、いざ洗礼をした翌日からは、ほっぽらかして、特別の導きをしない。これが何としても脱落の原因だと思う。

だから何年たっても、祈りが出来ない。どんな祈りをしてよいかも知らない。それから職場や家庭や学校で、仕事初めにどう祈るか、信仰をどう守るか、どう証しをするのか、具体的に指導しない。せめて小さなガイド・ブックをつくれないものか。「信徒必携」を、日本基督教団の東京教区で出し

れた福音が、「ヨハネによる福音書」である。

「栄光」は本来、神に属するものであって、地上では見ることのできないもの、神の権威と力と知恵との輝きである。この輝きは、この世の人には蔽われて見ることができない。しかし、信仰をもって打ち仰ぐとき、人はこの輝きに接することが許される。信仰ある者に、神は霊の眼を与え、霊によってキリストの顔にある栄を見るようにして下さる(Ⅱコリント三・一八参照)。ヨハネ伝の記者の見たキリストの栄光は、《父のひとり子としての栄光であって、めぐみとまこととに満ちていた》

「まこと」は、神の真実であり、神のこころである。神は何よりも真実の神であって、その人を救おうとする御心には、寸分の偽りもなく、くるいもない。神が人を救うために立てられた計画は、凡ての困難、すべての障害を突破して現実されるのである。それを実現せねば止まないところに、神の愛と真実とがある。この神の真実が、イエス・キリストであった。イエスは、《わたしは道であり、真理であり、生命である》と言われた(ヨハネ 一四・六)。イエスは神の救の実現のためにすべてをささげ、生命を捨てて神の真実の証明者となられた。神の真理は、神の真実である。イエスの十字架は、神の真実の証明である。

神の「めぐみ」もまた、イエスによって、私たちに与えらる賜物である。イエスはその賜物を、ご自分で持って来られたばかりではなく、ご自身が神の恵みであり、賜物であった。イエスは言われた。《わたしは命のパンである。わたしに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者は決してかわくことがない》。(ヨハネ六・三五)。また言われた。《この水を飲む者はだれでも、またかわくであろう。しかしわたしの与える水を飲む者は、いつまでもかわくことがないばかりか、わたしが与える水は、その人のうちで泉となり、永遠の命に至る水がわき上るであろう》(同四・一三—一四)。イエスご自身が命であり、光であった。そしてイエスの恵みは、その与える命、その暗きを照す光となってこの世に来り、私たちの光となり命を与えるのである。イエスの権威と能力とは、この世の王者の権力ではなく、「めぐみ」と「まこと」とに満ちている栄光の権力であった。イエスを信じる者は、上から賜わる霊によって、この「神のひとり子の栄光を見る」ことができ、その真理と恵みとに生かされるのである。それがクリスマスのもたらす祝福である。私たちはみな、この祝福を受け、心から感謝し、喜びに満たされたい。

本年のクリスマスが、信徒のすべてに、この祝福をもたらすよう祈って止まない。

(六) 罪観の浅いこと。

人を自動車でひき殺しても、オオ、ミステークですますような時代、映画、テレビ、週刊紙などで、他人の罪をバクロし、罪をあたりまえと肯定している時代である、現代人は罪という漬物樽の中にある大根みたいだ。罪が体肉に泌み込んでる。良心が鈍角になってる。これではキリストの救が、喜びとして受取れない。十字架の血の力を、体験しない。今日の教会は、十字架の血について説教していない。文化的キリスト教―血のないキリスト教になっている。「イエスの血、すべての罪より、我らをきよむ」の言葉が生きていないこれが信者の脱落する原因である。

(七) 二者択一の入信者がない。

キリストを信じねば地獄え落ちる！　地獄の説教も、この原水爆時代はきかない。生きるか、死ぬるか、どちらかの選択を前に決断してキリストを信じる入信者が少ない。

生活の便宜のため、修養のため、気安め的な精神的アクセサリーの入信だ。罪の悔改めを本気でやっていない。だから地獄から天国へは入った喜びがない。一升どっくりのように、入口と出口とが一緒で、は入ったとたんに流れ出る。この世と教会との区別は、はっきりすべきだ。「世にあるキリスト者だ」という神学論を、はきちがえてこの世と教会とを、一しょにしたら大変だ。牛乳一升びんに、牛乳八合、水二合は入っていても、これは牛乳ですとは、いくらあつかましくしても云へまい。まして牛乳三合、水七合のキリスト教では、問題にならぬ。教会は入信者に、二者択一の決意をする機会を、与えねばならぬ。

(八) 信仰義認の体験を与えないからだ。

プロテスタントの根本であるこの信仰を、充分に与えぬからだ。「私はだんだん救われてゆきます」位に考えている信者が多い。現在ただいま救われています！　との確信を与えなければならぬ。

(九) 宣教のよろこびをもたせよ。

他人の魂を救った体験を与えておけば脱落しなくなる。今日の教会は伝道しなくて講義をする教会だ。

(十) 奇跡を信ぜしめよ。

奇跡の時代は過ぎ去ったのではない。祈禱と断食の時代が過ぎ去ったのだ」とサンダー・シングは云った。祈るものは、いまも生きたキリストと語り、そこより奇跡の生れることを知っている。これを体験した者が、どうして教会より去ることがあろう。奇跡は今もある！　かく信じ、かく体験せしめることが、アトミック時代のキリスト教会のとるべき根本問題だと思う。

脱落する信者が悪いのでない。脱落さす教会が悪いのである。

ているが、もっとポピュラーなものが今日は必要になっている。救世軍の「兵士の巻」などは良く出来ている。「士官の巻」は教職の生活訓練の参考になる。

(二)　モデル・クリスチャンがないからではあるまいか。

カソリックにはカソリックの敬虔生活を、生かすための典型がある。修道院の生活がそれだ！　聖者と言われる人物が生れている。プロテスタントに於ても、典型的な生活はこうだ！　彼氏を見よ、まことにプロテスタントの典型ではないか、といわれるような人物が少い。ともかくも、手近にモデル、型、手本がない。そこが弱みではないか。パウロのようにすべての牧師や、伝道者が、「我れに見習え」右へならえ！　と言うことになれば、脱落者は少くなろう。脱落者の多くなるのは、牧師自身の生活態度に、大きな反省がいると思う。典型のないキリスト教は、滅亡するものと思ってよかろう。

(三)　兄弟愛の欠乏が目に見えてきた。

「見よ、彼らはいかに相愛するか」とは、外部から見た人々が、初代のキリスト教会に感心した声であった。

「見よ！　彼らは如何に無関心であるか」と、今日のキリスト教会の信徒は、云われるかも知れぬ。火のないところに、人は来ない。兄弟愛のないところに、人は腰をすえている筈はない。今日はみんな忙しいから、他人のために使う時間がない。相手の魂のめんどうを見る暇がない。

こんな悲惨な状態に追いこまれている現代に、相互に魂の面倒を見合い、「君の魂の健康はこのごろどう？」と安否を問うところは、教会だけだ。その教会が、社会の忙しさにまきこまれてキリストの血をもって贖った兄弟の魂の安否を忘れていては、申訳ないではないか。個人伝道、訪問伝道の切実に必要なことを、強調したい。

(四)　少数者の無力を意識しだした。

急激に変化する社会の中で、数で動いてゆく力が、主要な決定権を持つようになると、大衆の中での少数者としてのキリスト信者は、政治的に経済的に無力を暴露する。

こうなると初めての信者は、つまづきやすい。もっと目に見える姿に於て、教会の力を感じたいこの要求について理解し、良い教育を与えなくてはならぬ。

(五)　共同感情、共同モラルがない。

明治のキリスト教は、酒や煙草を飲まぬとか、神社礼拝はしないとか、その方法のよし、あしは別として、ともかくも共同のモラルの力点をもって、キリスト者としての共同感、一体感をもっていた。旗色鮮明な社会生活のマークがあった。キリスト者と云えば高い道徳生活をする者だ。他宗教よりもすぐれた生活をしてるとの評価をもっていた。今日は更にこの点を強調実現する必要がある。

最近は教会でも〃脱落〃について問題になっている。脱落が、最も激しいのは進学または就職・結婚の際である。受験準備の頃からそろそろ遠ざかり始めて遂に帰らずじまいになり、就職以来早く仕事や同僚になじもうとして、日曜も忘れて出かけて行くうち教会を離れてしまう青年、或いは前記のように結婚したため家庭に縛られて、教会へ帰る機会を失った婦人等、枚挙にいとまがない。

彼らはキリスト教になじめなかったのか？

さてこうした「元クリスチャン」「脱落者」が日本には数多くある。どうしてそうなったのか、何が彼らをそうさせたのか？　われわれはそれを考えて見なければならない。

卒直に言ってしまえば「あなたは初めの愛から離れてしまった。どこから落ちたかを思い起こし、悔い改めて初めのわざを行いなさい」(黙示録二章四・五節)に尽きる。しかし彼らはイエスの譬え話にある「土の薄い石地」と「いばらの地」(マタイ十三章五および七節)であったのだ。いわゆる精神的土壌が良くなかったのである。前者はイエスの御説明の通り「御言を聞くと、すぐに喜んで受ける人で、その中に根がないので、しばらく続くだけであって、御言のために困離や迫害がやってくると、すぐつまずいてしまう。そして後者は「御言を聞くが、世の心づかいと富の惑わしとが御言をふさぐので、実を結ばなくなる」人である。

いつも思う事であるが、日本人は実に宗教に対して寛大過ぎる。即ち「生れた時は神社へお宮詣りをし、結婚式はキリスト教会で挙げ、葬式は仏式でする」。こういう精神的土壌の浅さから信仰（教会生活）の根が下りないことになっているのではないか。外的には今見たような異教的社会につちかわれているために、信仰に入ってから後もなお心の底には異教的な気分や習慣が根を張っていて、ともすればもとへ戻そうとする力に打ち負かされるのである。かてて加えて内的には教会に於ける教育の不徹底がわざわいした、とも考えられる。世の波風に吹き倒されぬだけの根深い信仰にまで育てていなかった、そして本人は興味本位に教会へ行っていたのである。

何をすべきだろう

こうした〃元クリスチャン〃にさせぬため、また〃脱落者〃を出さぬために今後われわれは、教会教育をどのようにすればよいのだろうか？

「元クリスチャン」がそうなった原因の一つには、福音に対する躓きがあると思うが、今後のクリスチャンにはそれを取り去るという事よりもむしろ「宣教の愚かさ（Iコリ一ノ二一）に徹して福音を徹底的に理解させ、ものの考え方の根拠に福音的考え方が浸透して行くよう導く。そのためにカテキズム（信仰問答）を教えること。頭だけの信仰にならぬよう注意はすべきであるが、従来の日曜学校また教会は、話を聞かせ聖言をおぼえさせて教会教育こと足れりとして来たが、これらは至極く不可欠の事ではあるけれども、信仰の根が下りず固まらなかった。しかし今後は教会学校や教会、更に望

「元クリスチャン」は何故多いか

塚本且治

教会学校生徒や求道者の家庭を訪問するとき、親たちからよく聞かされる言葉は「わたしも子供の頃にはよく日曜学校へ行ったものです」とか「自分は若い時には教会でよく活動した」ということである「じゃぁ今は？」ときくと「もう卒業してしまいまして……」と頭をかいている。

前者は毎日曜日に（しばしば宣教師等から）いただく美しいカードに引きつけられ、小さいのが幾枚かたまると大きいのをくれるのが楽しみで「よく行った」人であり、或いはクリスマスにプレゼントがもらえるので〃教会はクリスマスに行くもの〃としていたような人であろう。

後者は学生時代、英語をおぼえるためにとか、ちょっとした〃思想的先覚者〃になるためとかの目的で行き始め、洗礼も受け、若くて元気でよく働くから、教会も重宝がって、やれ青年部委員だの、やれ日曜学校教師だのと仕事をさせた者であろう。

ところが学校を卒業して社会に出ると、職業と生活とに追われ、年が経つにつれて地位も上がり、時間的経済的しわよせは教会にもって来て、回を重ねて礼拝を休むうち、ついに「教会の敷居が高くなって」いつの間にやら「卒業信者になってしまった「娘時代にはよく教会へかよった」婦人も、心ならずも勧められた未信者との結婚に、信者であること、教会へ行かしてほしいことをつい言い出しかねて、これまた「卒業」してしまっているのである。

先日ある労働組合で調べた処によれば、労組員のうちクリスチャンは一・一％、家族または親戚が信者というのが四・二％、子供の時は日曜学校の生徒だったという者三三・四％、一度でも教会へ行ったことがある者が四八・一％だったという。ここにも子供の時や若い時分は、日曜学校または教会に興味をもったが、大人になり社会に出ると興味が薄らいだばかりでなく〃昔語り〃になってしまった人が多いことを示している。

酒に酔ったとき教会を思い出して転がり込む「元クリスチャン」もある。

これらの人々の中には、自分たちは、も早やどうにもならなくなったから、せめて子供には宗教々育をしたいものと、子供を教会学校へ引っぱって来るのもある。

こどもたちは劇活動から学ぶ

ワシントン大学演劇科助教授
ヂェラルディンB・シックス



こどもたちは創造的である。彼らは遊び、探り、考え、夢見、そして行う、常に自分たちの生活の手本となるべき英雄を求めています。神はこどもたち一人一人に、神秘的な、創造的で、探究的な魂を与えておられるのです。しかし子供たちにとったらそうした創造的慾求を、その生活の中に一定の目的のためにどういう風に使うかは教えてもらわねばりません。

このような創造的な演劇はこどもや、青年たちをその生活に即して教えるのに最も功果的な方法で、特にこどもたちに神の世界の偉大な英雄たちを知らせるのに用いられます。こどもたちは、さまざまの劇的な遊戯を通してキリスト者の生活ということとを自分で創造的に考え、解釈して、これを学ぶ機会を得るのです。こうした劇的な遊戯を通してこどもたちは印象を深め、思考し、論じ、そてし表現するのです。これは集団的芸術であってこどもは他の人々のいるところでいろいろなことを学びます。

二つの実例

五歳になるこどもたちが美しく花が咲いているリンゴの枝を先生の指導の下によく気をつけて見ながら、神さまの創造のみ業のすばらしく、かつ不思議だということを考えていました。やがて彼らは神さまがおつくりになった鳥や、けもの、木や草など生長するものについていろいろと話しあった。やがて、こどもたちのムードが熟して来た頃合いを見て、先生はこういいました。「今日ね、みんなで、神さまのおつくりになったものを、も一度つくって見たいと思うの、さァ、みんな目を閉じて。それから何でもいいから自分で一番美しいと思うものを考えましょう。いい？一番美しいものがきまったら、あなたがたがその美しいものになったつもりで、この森の中からしづかに動いて中央に出てゆきましょう。私は風さんになってしづかな風の歌をうたいます。そして風さんが目をさましてあげた方は、その一番美しいものが朝になって目がさめたらどんな風に動き出すか考えて、そのようにしてみましょう。」

やがて一人のこどもがいかにも自信ありげにサークルの中央に出て、うづくまりました。すると他のこどもたちもひとりひとり、立って中央に出て、ある子はまっすぐに立ち、

ましい事は家庭で、大人も子供もカテキズムをおぼえ、知識的にしっかりしたものを土台とした、そして霊的に恵まれたと信仰者になってほしい思う。

〃わたしは、彼らが神に対して熱心であることはあかしするが、その熱心は深い知識によるものではない〃（ローマ十の二）と言われることのないために……。

マルチン・ルーテル小教理問答書などを見れば、十戒にしても使徒信条にしても「一家の主（あるじ）をして、その家族に説明をなさしめるため、平易に記したもの」とて解り易く書かれている。こういう物の必要を感じる。

次には個人の信仰が確立されて容易に動かないものとなり、各自がよりよい真実なクリスチャンになることを生涯の課題とさせること。そのために成人科設置の必要性を感じる。これまでは教会学校とは呼びながら昔の日曜学校で小・中学の子供たちに宗教々育を行ない、高校生・大学生のために別なクラスが開かれていたが、それ以上の年令の人々や職業青年に対する教育が充分なされていなかった。それには人材や教室の不足は充分承知しているが、教会教育が学生年令でストップになり、それ以上の成人（社会人）に対してなされないならば、彼らは間もなく〃卒業信者〃になってしまい、元のもくあみに帰って行くことを残念に思う。充分にたがやされ、充分に養われた信仰をもって社会に活動できる人を送り出さなければならない。社会が真に要求しているのはこのような人である。

更にキリストを中心とする家庭を作り、家庭が「小さな教会」という意識をもって教会を支える肢となるべきである。妻が、夫が「元クリスチャン」の恥をあらわさないために、結婚は能う限り信者同士ですることが願わしい。そうして主を中心に結び合った、美わしいクリスチャン・ホームが確立される事を望むや切である。夫が妻を励まし、妻が夫を助けて、聖日ごとに全家あげて教会の礼拝につらなり、家庭の一切の行事をキリスト教的に行なうことはどんなに美しい事であろう。これによって自分たちの信仰が確立するばかりでなく、周囲の人々を信仰へ導く、有力な伝道が出来る。結婚の条件の一つは、信者であることを先ず考えるのはもちろんであるが「活きた」信仰であることを強調しなければならない。

こうして今後「元クリスチャン」という悪名をきた者が出ないよう祈り、養い、教育して行かなければならない。教会教育の責任は重かつ大である。

メリー・クリスマス

今年一年の御講読をかんしゃいたします

教会教育編集部一同

た。

小学下級のこどもたちに対してクリスマス単元の主たる目的は、神さまはこの世を愛するみこころを人々に知らせるためにイエスさまを赤ん坊にして送って下さったということを教えることで、この単元はとても劇的な要素を多くもっています。教師はクリスマス物語の主要な点のいくつかをあげて話したり、又は一つ、二つの要点に集中して教えるかするわけです。その劇的場面をいくつか掲げて見ると、まず第一場は天の神の御座の場面で天使たちが地上のありさまをそれぞれの時代を代表して、人間の悩んでいるようすを述べどうしても神様にお願いして、人々に神さまの愛を示すために誰かをお送り願い、人々が互いに愛しあうようにして頂かねばならぬと話しあう場面。第二場は丘の上の羊飼いたちの場面、次に宿屋を求めるマリヤ、ヨセフとそして宿屋の人たちの場面、最後が博士たちの場面です。そしてこれらの場面を無言劇で演じている間にこどもたちの心に「うちの人たちに対する自分の愛情を何かで示す」という気持ちが湧くように導くことが大切なのです。

又或る小学上級の単元に聖書の理解について教えるのがあって、その目的は神のみことをば学んで神の御性格とそのみ心を知ることにあった。そして「神さまは聖書によって私たちに語りかけていらっしゃる」ということが単元の強調点で、これに用いられるお話はアブラハム、イサク、ヨセフの生涯とモーゼの生涯のうちの劇的場面等が用いられるわけですこれらは皆劇化的要素が豊富で、これらの物語を劇にして演出する間に、その意味を感得するのです。たとえばこどもたちがモーゼという人物を論ずる場合に、これを劇にして演じてゆく間にモーゼが神にイスラエルの指導者となるように召された時に、如何に考え、如何に感じ、如何に行動したかを理解し、話し合いしたら、何故モーゼがはじめに辞退して、これをうけなかったか理解するようになるでしょう。こうしたこどもたちは、単にモーゼを理解するばかりでなく、モーゼのような境遇に自分がおかれ場合に自分もそうすると考えるようになるのです。そして勇気、信仰、個人としての責任等についても、もっと深く理解するでしょう。

創造的な経路

この創造的劇化によって教える鍵となることは「ガイダンス（指導）」である。ある人はこれに対してどうして創造的思考、劇的感情に対して指導が必要なのかと不審がるでしょう。こどもが自分で自由に考えて遊ぶというのならば教師は、お話を読んでやり、あとはこどもたちが自由に自分で役を選び、それを演ずればよいではないかという人がいましょうし、事実そういうようにしている教師が相当たくさんいます。しかしある教師がいうように「そういう風にやったのでは子供たちは少しも創造的にならないで、唯騒々しく、纏まりがなく、後でつまらない気持ちになってしまう。その遊びはどんなにかたどたどしくなり、生気のないものになってしまうのがおちです。遊んでいる間に創造的に考えたり感じたりするこどもはそう多くはいないのです」一人なら創造的に考えたり感じたり出来ても、十人、十五人と一緒になって創造的劇化をするということは相当訓練され、チームワークが出来ていないとできないことです。

この指導を成功させるには教師は創造的経路ということを心得ていなければなりません。それは要約すれば㈠ムードをつくる。㈡物語とか、一つの考えを語り、みんなに理解させる。㈢こどもたちがこれを考え、感じ、そして一つの計画を作るように指導し。㈣こどもたちがこれを演じ、その演出を自分たちで評価するようにする。という四つの点にしぼられましょう。

ムードを作る　一体ムードというものは一人一人の中にあるもので、これは感情にあお

ある子は這って、又もう一人の子は、床の上に手足をひろげて伏し、別の子はうづくまりました。何人か出たら先生は、他のこどもたちに、「あとで自分の番でやりましょう、今はこの子たちのするのを見ていましょう」といって、やがて風の歌なり、なにか口を閉たままハミングで静かに歌いながら、静かに中央のこどもらのいる中を動きまわります。すると森の中のさまざまの生きものが、それぞれ動き出し、こどもたちは自分が考えた生物になったつもりで、自分の考えたように動きだすのです。風さんは静かにその一人一人に「あなたは何さんですか？」と尋ねると、「私はタンポポです」「僕は森中で一番背の高いクリスマス・トリーです」「僕は森の中で木の実を拾ってたべる栗鼠です」「私は森の中の花の咲く山吹よ」とそれぞれ答えるのでした。

(その2)

又四、五年生のクラスで神さまが自分たちの生活の中にいて下さることを思うように教師に指導され、生きていることの喜び、すばらしさ等を話しあい、これをどう表現したらよいかということを話していました。先生はクラスのこどもたちが、とても一つのムードに熱して来ているのを見届けると「すべてはうるわし、神をほめよ」（日讃一三）をクラスの半分のこどもたちでハミングで歌ってもらい、他の半分のこどもたちには、「この歌に歌っているようなとてもうれしい時にはどんなことをしたいか、めいめい自分が何をしたいか考えて、各自ヂェスチュアでそれを表わして御覧なさい」という。

こどもたちはある子は泳ぐまねをし、自転車でハイキングに行くまねをし、又ベースボールのまねをし、又あるこどもはお祈りを、讃美歌を歌うジェスチュアをした。又あるこどもは私は富士山を写生するの、いつでも富士山や高い山を見ると私は神さまを思うの。」と自分の動作を説明するのです。

学習に必要なこと

創作的な劇的なことは教師がこれをこどもたちに学課を理解させるために用いることは学習に必要な、不可欠部分となって来ます。もちろん学課はどれでも劇化の対照となるものではなく。ある学課は話し合い、又或るものは他の学習活動を用いるべきでしょう。教師はその都度、どんな方法を用いたら一番よいか決定すべきであって、劇化といっても無言劇、ジェスチュア、対話など種々あって、もしこの学課は劇化にするのがよいと思ったら教師はまずこどもたちがこれを演出するような創作的ムードを起すようにするためにいくつかの質問を準備せねばならぬ。そのためには歌、物語、詩、歌いながらするゲーム等をあらかじめ考えて、用意しておく必要があります。

これを実例を以って説明しましょう。それは「私は教会に行く」という低学年の学課で行われたことですが、学課の目的とするところは教会に行くということが人々の生活に大切なことであるということを教えることでした。教師はこのことを無言劇、ジェスチュアなどでその経験をこどもたちに味わせたいと思いました。十分考えた末、以下のようにすることにしました。「教会に行くお仕度をします」こどもたちは顔や手を洗い、口をすすぎ、髪を調え、着物を着換え、献金の用意をする動作をします。「私たちは教会に行きます。」こどもたちは家族と一緒につれ立って行く、自動車で行く、電車や、バスに乗ってゆく動作をする。「教会には誰でも行きます。」こどもたちはいろいろな職業をしている人が仕事をやめて教会に行く動作をする。ベースボール選手、牛乳や、新聞配達、料理人、医者等々、「これが教会です」、ここでこどもたちはこどもたちの考えているままに教会ですることを動作で示す、扉をあけて中に這入る、さんびかを歌い、お祈りをし、献金をする、時には説教をする子供もありまし

児童説教

教会暦の新年が始まる



教会暦はアドベントから始まるから、一般暦より一ケ月早くお正月を迎えることになる。むろんこの新年はイエス・キリストの誕生を迎えることから始まる。

アドベントはクリスマスを待ち望む期節であって、日曜日は四つあるが、クリスマスは一二月二五日とさまっているから、どうかすると一一月の終りから始まることもある。数え方は、一二月三日に一番近い前後の日曜日を、アドベントの第一主日とすればよい。

クリスマスは無条件に嬉しいお祝いの日であるが、アドベントはこのクリスマスを迎える準備の時であるから、喜びよりも主を迎えるにふさわしい備えをする時である。洗礼のヨハネはキリストを迎えるために道を備えるのだといったが、彼は民の前に立って痛烈な悔い改めを説いた。われわれも、主を正しく迎えるためには、自らの罪を悔い、祈りと反省をしなければならない。教会の色は紫である。またキリストを迎えるのには、ベツヘレムのイエスを迎えるだけでなく、今も生きておられる主を、わたしたちの心に迎える意味もあり、再臨の日に再びきたりたもう主を迎える意味もあるので、日課ではそうしたことが取り上げられるはずである。

クリスマスは、その前夜の二四日のクリスマスイブの礼拝から始まる。クリスマス礼拝は二五日の零時、つまり深夜礼拝として守られることが多い。二六日は、殉教者聖ステパノの日である。

一二月 三 日

正しい心・よい行い

聖書　ふたりとも神のみまえに正しい人であって、主の戒めと定めとを、みな落度なく行っていた。　ルカ一・一―二五

寒い寒い冬がやってきました。あまり寒いので、大すきな野球ももう思うようにできなくなりました。でも楽しいクリスマスは、すぐ町角まできています。小さいお友だちは、サンタの夢を見ていることでしょう。そしてあなたも、〝心に遠い昔のユダヤの国の出来事を偲んでいることでしょう。まだ羊飼たちは、舞台に出ておりません。東の国の博士たちの登場もまだです。エルサレムの宮では、信仰あつい男女が多勢あつまって、熱心にお祈りを捧げていたと、今日の聖書は教えています。

ザカリヤは宮の祭司でありました。ちょうど組の当番に当っていたので、宮の聖所に香をたき、神様に熱心に奉仕していました。すると突然、彼の所に天使があらわれました。そして言うには

〝ザカリヤよ、あなたの祈りが聞き入れられたのだ、あなたの妻エリサベツは男の子を生むであろう。その子をヨハネと名づけなさい……〟

多くの少年・少女は家庭にお客を迎えることを喜びます。でも天使を迎えることができたら、どんなにすばらしいことでしょう。ザカリヤはこの光栄を受けたのです。しかし彼は失敗しました。彼はさきの天使の約束をすぐ信じませんでした。それはその時、ザカリヤもエリサベツも老人でしたから、とんなに年をとってしまってい

られた思考です。すべての芸術というものはムードの世界において創造されるもので、ドラマができる以前にこうした共通の気分、気持ちがなければできません。それで教師はこどもたちの思考や感情が喚起されるためにいろいろ質問をして物語や学課についての特定のムードになるように助けてやるのです。

一つのムードが湧き起るのでなければ、その演劇は目的のないものになります。例えばいきなりこどもたちに一人一人、一つ一つの雨となったつもりになって見よ、というとこどもたちはとても元気に部屋中を飛んだり躍ねたしてはしゃぎまわるでしょう。しかし何の目的もその中には感ぜられていません。これに反して教師が自然における神の御計画について不思議を感じ、これを考え、それからこどもたちが雨になると、その雨の動作には意味があり、感情があり、目的があるものとなり、そしてそのムードにおいて、こどもたちはこどもらしい理解をもって美しい神さまの御計画を演ずることになります。

こどもたちに考えさせ、計画させる。こどもたちが一つのムードになった時に教師は物語なり、一つの考えを話して聞かせ、そしてこどもたちを考えさせるような質問をし、自分たちの演ずる劇を感情をもって理解するように導きます。その質問は大体何が、いつ、どこで、誰が、どうして、何故といったような言葉で質問され、それらのことばがこどもたちを知的に、感情的に相当刺激してこれに答えるためには彼らが相当努力するようにし、例えば小さいこどもに雨に対する不思議という感じを起すためには、雨のしづくは一体どんなに見えるか？どうして天から落ちてくるのか？蒔かれた種子や、小さい木が水に渇いているのを元気をつけるために「雨さん行っておいで」といわれて天から降ってくる時、雨さんはどんな気持ちで降ってくるでしょう？皆さんもどう？誰かを喜ばせてあげるためにお使いに行く時はどんな気持ちがするでしょう？というような質問をして考えさせるのです。

大きいこどもたちであれば、良きサマリヤ人についての感じを作るためには次のような問いで答えさせるとよいでしょう。サマリヤ人が道傍に人がうめいて助けを求めている声を聞いてどんな気がしたでしょう？サマリヤ人はなぜ、祭司やレビ人が知らぬふりをして通り過ぎたのに、立ちどまって、この人を助けようと思ったか？他の人に対して気の毒に想うということは一体どういうことであろうか？等です。

こどもたちの演出指導　演劇をやる場合には教師はクラスを二つに分けて観衆と演者に分け、大体元気のよい積極的なこどもたちを先きにやらせ、後で恥かしがりの子や、ひっこみ思案のこどもたちもやがて一緒にやれるように配慮します。しかし教師は出来るだけしっかりしたこどもに指導の役をまかせて、こどもたちが徒らに先生の命じたことを模倣したことにならぬよう、どこまでもこどもたちの自主的な演出になるように注意します。

こどもたちにその演劇を自分で評価批判させる。演劇がすんだら、その度ごとに必ず、お世辞でなく、できるだけ正直に、こどもたちを個人として、グループとして奨励するように心掛けます。又観衆になったこどもたちからも着想、演技、演出、特に劇的な好果があったとか独創的な点などについて自由な批評をさせることです。それから教師は次の時にする劇について考えさせるような質問をいくつかすることもよいでしょう。

一度演劇法による教育をやって見た教師はその経過の指導のために費した多くの努力が決して無駄でなかったことを必ず知るに違いありません。こどもが一生懸命になってその考えや感情を表現しようとして創造力をかたむける有様を見ることは教師にとって生命の奇跡を見ることであり、こどもを教えることの大きな報いを知ることなのです。

でもできないことはありません。」この御使のことばをきいてマリヤさんはさきほどのおどろきや心配も消えました。いや心の中にはまだ残っていたかもしれません。しかしマリヤさんは安心しました。神さまのなさることなら、それがどんなに人々から誤解されるようなことであっても心配してはならないと思いました。そのときマリヤさんの口をついてでたことばは「わたしは主のはしためです。お言葉どおりこの身に成りますように」ということでした。なんというへりくだった、すなおなことばでしょう。それまでのマリヤさんは、ほかの人々と同じように、やがてヨセフさんところにおよめいりするときは美くしい着物を着て、多くの人々にうらやまれるようにありたいと考えていたことでしょう。けれども天の御使のおつげをきいてからは、そのような世間ていのことはまったくうちすて、ただひとすじに神さまにおつかえするはしためになろうと思いさだめました。

イエスさまは実にこのようなかたを母としてこの世に生まれてこられました。イエスさまが神の子として、また世界の王として誕生されるまでにはこのような深い神さまの御計画があったわけです。

私どもも一人一人神さまのおめぐみのうちにこの世に生まれ、そして今このようにいかされているそのさいわいを感謝しなければなりません。

池永　春生

――一二月一七日――

ヨハネの約束

聖書　**イスラエルの多くの子らを、主なる彼らの神に立ちかえらせるであろう。**　**ルカ　一・一六**

イエスさまのお生れになったのは、一二月二四日です。さて、このイエスさまが大人になられた時に、洗礼をさづけた人の名前を知っていますか。バプテスマのヨハネとよばれる人ですね。それではこのヨハネさんが生まれた日を知っている人?。ヨハネの生れたのは六月二四日です。聖書のルカ伝のところをひらいてみましょう。一章です。ザカリヤというおじさんに、神さまからのみ使が来て、「あなたの妻のエリザベツは、男の子を生むでしょう。その子をヨハネと名づけなさい。」といわれました。それから六ケ月たってから、神さまのみ使は、マリヤさんにあらわれて、「おそれてはいけません。マリヤさん、あなたは、神さまから特別の恵みをいただいているのです。あなたに男の子が生れるでしょう。その赤ちゃんのお名前は、イエスとおつけなさい。その赤ちゃんイエスさまは、大人になって、神さまを信じる人間すべてのたましいを救って下さるお方になられます。」といいました。

イエスさまが、この世にお生れになったのは、私たち一人一人の心をきよめ、救ってくださるためとわかりましたね。それでは、ヨハネさんは、なんのために生まれて来たのでしょう。

ヨハネさんは、イエスさまがこの世に生れたまい、私たちと一緒に生活して救い主としてのお働きを十分されるための道ぞなえとなる責任と、イエスさまは救い主ですよと人々につげるために生れて来たのです。

ヨハネさんはずいぶん大きなお仕事をもって生れて来ましたね。ヨハネさんは、大きくなってから「ナザレより出たイエスという人は、わたしたちの罪をゆるし、血によって私たちをきよめてくださるのです」と証言し、人々に云って歩きました。

るのに、どうしてそんなことがわたしにありましょうかと、不信仰な答をしてしまったのでした。もし、あなたのお家へ天使が訪ねて来ることになったらば、どうしましょう。お家をきれいにかざって待ちますか。着物を着かえ、御馳走も準備して待ちますか。そうです、あなたはできるだけのよい準備をして待たなければなりません。

さて、天使は何を一番喜ぶと聖書は書いてるでしょうか。どんな人のところへ天使は訪ねてきたと教えていますか。天使を迎えたザカリヤも、その妻エリサベツも、二人とも神の前に心の正しい人々で、主のいましめと定めとをみな落度なく行っていたということです。天使は心の正しい人がすきです。あなたの心はどうでしょう。うそ、ねたみ、いじわるなどいけませんね。しかし、正直、親切きよい心などをもっていたらいいと思います。ザカリヤ夫婦はこのよい心をもっていたのです。その上に、いま一つ大事なことがありました。

〝主のいましめを行っていた〟

ということです。どんなによい心をもっていたとしても、それだけでは不充分です。実行が大事です。山室軍平は、イエス様は信仰するからには、その信仰を実行しなければいけないと言って、いろいろ人に親切をすることにつとめました。正しい心で、よい行いをする、少年、少女になりましょう。このような人を神様はお喜びになって下さいます。

小谷野英朗

一二月一〇日

王として生まれるキリスト

聖書　わたしは主のはしためです。お言葉どおりこの身に成りますように。　ルカ　一・三八

イエスさまの御誕生の時が近づいてまいりました。人間はだれでも神さまの深い御計画のもとにこの世に生まれてくるのですが、イエスさまの場合にはそれが大変はっきりあらわれています。

マリヤさんのところにある日、天の御使がまいりまして「マリヤさんおめでとう、神さまがあなたとともにおられますよ」といいました。マリヤさんはなんのことかわからず不安そうな顔をしていますと、御使が「心配しないでもいいよ、あなたは神さまのおめぐみで男の子をうむでしょう。その名前をイエスとつけなさい。この人は神の子ととなえられてイスラエルを支配する王となるでしょう」といいました。この思いがけないしらせにマリヤさんはおどろきました。といいますのは、マリヤさんはそのときまだおよめにいっていなかったからです。それに赤ちゃんがうまれるだろうと言われ、こんなふしぎなことはない。もしそれがほんとうなら、どうしたらいいだろうとずいぶんなやみました。けれども神さまのめぐみはマリヤさんのなやみよりはるかに深かったのです。「神さまのみたまがあなたにのぞみ、神さまの力があなたをおおうでしょう。だから生まれてくる男の子はきよい神の子ととなえられるでしょう。あなたの親類のエリサベツもとしよりですが神さまのおめぐみで子供をうむことになります。ふしぎがってはいけません。神さまにはなん

いただき、神さまのすくいにあずかることが、なすべき第一のつとめではないでしょうか。祈りましょう。

吉野　文夫

十二月三十一日

羊飼いの来訪

聖書　**羊飼たちは、見聞きしたことが何もかも自分たちに語られたとおりであったので、神をあがめ、またさんびしながら帰って行った。**

ルカ二・一五－二〇

お家であかちゃんが生まれると、みんな大喜びをします。親類の人々やお父さんやお母さんのお友だち等が、あかちゃんが生まれたと聞くと、さっそくお祝いにかけつけて、お祝いを持ってきてくださいます。あかちゃんの泣声がきこえ、美しいおもちゃや、きれいな着物などが、部屋にいっぱいになると、急にお家の中が目がさめるようにあかるくなって、家中に喜びがあふれます。

イエスさまがお生まれになった時は、どうだったでしょう。前の週のクリスマスの時に、お話を聞いたでしょう。ちょうど人口調査があってベツヘレムの小さな町は、人出でごったがえしていました。ところがその混雑から置き捨てられた、だれも知らない旅館の片隅の馬小舎で、のどかな牛の鳴き声をききながら、お母さんのマリヤさんと、お父さんのヨセフさんに守られてイエスさまは飼葉おけのベッドですやすやねむっていました。マリヤさんたちは、旅先きでしたから、お産の仕度も十分にできなかったので、うぶ着もなく、ありあわせの布切れでくるくる包んであったように聖書に書いてあります。それにお祝いに来てくれる人はだれもないし、はじめての赤ちゃんではあるし、きっと淋しくて、心細かったことだろうと思います。

ところが、そこにいちばん先にお祝いに現われたのは、だれだったでしょうか。親類の人でもなく、お友だちでもなく、見たこともない、粗末ななりをした数名の羊飼いのおじさんたちでした。この人たちは貧しい、学問もない、だれからも注目されたことがない労働者でしたが、大自然の中で星空を眺め、羊を相手に暮しているうちに、神さまをおそれ、神さまに仕える信仰を持つようになっていました。ですからイエスさまがお生まれになった時、まっさきに天使の歌を聞いて、神のみ子がお生まれになったことを知り、イエスさまを拝みにきました。そしてイエスさまを見て心から喜び、神をあがめ、さんびしました。このことにはたいへん大切なことがふくまれています。

クリスマス売出しや、ジングルベルで騒いでいては、イエスさまのお生まれになったことはわかりません。羊飼いたちのように、静かに神さまを仰ぎ、すなおな心をもってイエスさまをお迎えするとき、イエスさまはわたしたちにはっきり姿をお示しになり、わたしたちの心の中に宿って下さいます。ルッターは、クリスマスの前夜自分の子供の枕もとで、次のようなクリスマスのうたを作って、歌ってやりました。

よくこそましけれ　貴いイエスきみ
いかなるものもて　君をばもてなさん
こころのふしどの　塵をばはらいぬ
愛するイエスきみ　静かにいねませ

尾山　城生

さて、ぼくたちや私たちは、この世の中になんのために生れて来たのでしょうか。「何のために生れて来たの？」

「神さまによろこばれる子になるため」、「光の子どもになるため」、「神さまをほめたたえるため」、きっといろいろのお返事がでてくるでしょうね。おやだれ！「生れちゃったから生きてんだ」などいうのは、君にだって、神さまは、こういうことをなさいといっておられます。それはヨハネさんと同じように「イエスさまは、救い主です」と人々に知らせてあげることかも知れませんよ。

木塚　天

一二月二四日

イエスの誕生

聖書　暗黒と死の陰とに住む者を照し、わたしたちの足を、平和の道へ導くであろう。
ルカ　一・七九

今日は「字もない画もない三頁の本」という珍しい書物のお話をしましょう。まずその一頁をめくって見ると、まっ黒に塗りつぶしてあって、何も書いていません。さて何と読めばよいのでしょう。まっ黒とは何をあらわしますか。黒ん坊、スミ、たどん、闇、罪、死、ろくなものはありません。聖書には「暗黒と死の陰とに住むもの」とあります。神さまを信じない世界は、一寸先は闇で、墓場がその終点です。神さまにつくられ、養われ、いかされている私たちは、神さまをはなれて、死となやみと、罪とほろびのあるのがあたりまえです。それでは二頁をあけて見ましょう。ここは、まっ赤です。字も画もありません。さて何とよみましょうか。赤いダリヤもみぢ、赤とんぼ、血、火、冬になると、だんだんあたたかい火のそばがこいしくなってきました。火がなかったら寒い冬はこせません。

そのように、神さまの愛の火がなかったら人間は、いきていくことはできません。「神は、そのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さった。それは御子を信じる者が、ひとりも滅びないで永遠の命をうるためである。」ヨハネ三・一六。

この神さまの愛の火が、とうとう、イエスさまを、この世におおくり下さって、十字架におつきになり、尊い血を流されて、私たち人間をすくって下さったのです。イエスさまが救主といわれるのがそれで、クリスマスは、そのイエスさまのお生れになった日です。

さて、最後の三頁をあけますと、まっ白、白いものには何がありますか。雪、白菊、白紙、砂糖、乳、白い大根、しろいごはん、ずいぶんいろんなものがありました。

聖書をあけて見ると、次のような聖句が見つかりました。「わたしを洗って下さい。わたしは雪よりも白くなるでしょう。」（詩五一・七）タドンのように黒い罪も、イエスさまの、十字架の血にきよめられ、白い、きよいものとして、天の御国の民に加えていただくのです。

さあ、「字もない、画もない、三頁の本」のわけがわかったでしょう。初めの聖句をよみましょう。「暗黒と死の陰に住むもの」神さまの光りがすみずみまでてりわたっていないこの時代には、戦争や原爆や、うらみや、ねたみはたえません。いつになれば平和の道を歩むことができるでしょうか。

私たちの大切なことは、クリスマスにお生れになった、イエスさまを信じて、そのはかり知れない神さまへのそむきの罪をゆるして

うすなわち、これを意訳すると「すべての事がらの中でも特に、現在のこの瞬間がいかに貴重な、再び得難い瞬間であるかを記憶すべきである」と言う意味のことばで書き初められているのである。

私たちは、今のこの時、この瞬間をどのようなものとして受けとり、どのような態度でこれに臨んでいるであろうか。

さきに引用したNEBでは「remember how critical the momentis」と訳している、この critical と言うことばが示しているように私たちが今、直面しているこの時、この瞬間は実に危機的な様相乃至は性格をもった瞬間なのである。それは貴重な、再びめぐり来ることのない瞬間であると同時に、次の瞬間の有無が推り知られない（殊によったら、これが最後の瞬間となるかも知れない）ところの厳粛な瞬間なのである。

主イエスは「愚かな農夫の譬（ルカ一二・二〇）を通して「愚かな者よ、あなたの魂は今夜のうちにも取り去られるであろう」と警告を発せられた。

聖パウロは「夜はふけ、日が近づいている」（使徒書）と言い、又「私の言うことを聞いてほしい、時は縮まっている」（Ⅰコリント七・二九）とも言っている。

聖パウロは今の時を「夜」と言うことばで表現し、主イエスは「やみの支配の時」（ルカ二二・五三）と言われた。たしかに今は悪の力が横行し、不義が勢を得て光が、かき消されてしまったかに見える時代である。

しかし夜は、すでに更け、東の空が白みそめているのである。義の太陽がその驚くべき、圧倒的な力をもって暗黒を駆逐する時が刻々に迫りつつあるのである。

しかも今のこの時は我らにとっては「恵みの時」であり「救いの日」なのである。さきに、貴重な時、再び得難い時、と述べたのはその意味である。誰でもが、然り、どのように罪深い者であったとしても、悔改めと信仰をもって洗礼の聖奠にあずかることによって神の子、天国の嗣とされることが約束されているのである。

今は聖霊によって証されているだけであるが、やがて義の太陽が昇る時、天国の嗣たることが、あらわにされるのである。

されば、来るべき「主の日」は、光の子らにとっては待望の日であり歓びの日であるが、闇の子らにとっては恐るべき審判の日であり絶望の日である。

我々が直面している、今のこの時、この瞬間が、このように重大な、厳粛な瞬間であることを自覚するならば、我らの為すべきことは自ら明かとなるであろう。未だ主の救いに与っていない者は、この「恵みの時」を逸するならば悔いを永遠にのこさねばならない。すでに天国の嗣たることを約束された者は本日の福音書によって見らを糾すべきである。

生ける神の宮（Ⅱコリ六・一六）は強盗の巣になっていないであろうか、主の日は近づいている。

降臨節第二主日

来るべきキリスト

一二月一〇日



主日の趣旨　主を迎うる備えをなすべき降臨節の第二の主日は聖書の主日として守られる。それは聖言に聴き、従うことこそ主の降臨

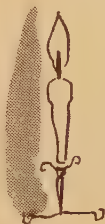
礼拝説教



降臨節第一主日

来るべきキリスト

一二月三日



主日の趣旨　本主日は教会暦における新年、元旦に相当する。もちろん、われわれの教会生活に切れ目がないように教会暦にも切れ目はなく従って始めもなく終りもない、降臨節第一主日が一年の教会生活の始めであるとは言うものの、その前の主日は降臨節前主日であって、すでに降臨節を迎える準備がなされているのである。教会暦を円形または、環状をもって表わすのはそのためである。

しかもなお、われわれはあえて、降臨節第一主日を教会生活の新しい一年の出発の日として守ることに重大な意義を感ずるのである。

疲れ易いわれら、躓き多きわれらも心を新たにし、決意を新たにして起ち上る機会を与えられるからである。

降臨節は降誕節を迎えるための準備の期節である。この準備とはお祭騒ぎのための準備でないことはいうまでもない。

降誕節が「わが衷に主を迎えまつる日」であるとするならば、どんな準備が必要であるかということは、おのずから明かになるであろう。降臨節の各主日の主題は、この備えについて指針を与えてくれるのである。

主題　**時を知れ**

福音書　ルカ　一・一—二五
使徒書　コロサイ　一・一二—二三
旧　約　エレミヤ　三三・一四—一八

祈り　全能の神よ、御子イエス・キリストは我らを顧み、卑しきさまにて、このはかなき世にくだりたまえり、願わくは今くらきわざを脱ぎ、光のよろいを着る恵みをあたえ、終わりの日に生ける人と死ねる人をさばかんとて、大いなる栄光をもって再びくだりたもうとき、とこしえの生命にいることを得させたまえ。父と聖霊とともに世々統べ治めたもう主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。　アーメン

説　教

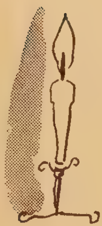
本日の使徒書は、われらに「時を知れ」と警告している。

ロマ一三・一一は今迄に出たどの訳本よりも、新刊のニュー・イングリッシュ・バイブルが原文の趣旨を適確に伝えているように思

たのである。
　この世界は運命と云うような盲目的な意志によって支配されているのではなく、神の永遠の御経綸によって統治され、進められていると言うこと、しかもその神がすべてのものにまさって、われわれ一人一人を愛し、限りないいつくしみをもって見守っていて下さると言う、驚くべき事実を語り聴かされたのである。
　われらの人生には真のよりどころと言うべきものが無いと考えていたわれわれに、意外にもわれわれが全身全霊を傾倒して頼ることの出来る真のよりどころを教え示されたのである。
　この世は、うつろい易きもの、すぎゆくものであり、一切はやがて空に帰するもの、果かなきものと考えていた私たちは、意外にも永遠に変ることのない実在者、即ち神の存在を明かに教え示され、しかも、その永遠の実在者でありたもう神の生命に、われわれもまたあづからしめられると言う破格の恩寵に浴する光栄への招待に接したのである。これがキリストの福音であり、この福音の書がわれわれに与えられている聖書なのである。
　「天地は滅びるであろう。しかしわたしの言葉は決して滅びることがない」(福音書)

降臨節第三主日

降臨に先立って



一二月一七日

主日の趣旨　主の最初の降臨を迎えるために、神によって選ばれ遣わされたのは預言者たちであった。そして主の第二の降臨、即ち再臨の主を迎える備えをなすために選ばれ、召され、遣わされているのが牧師、教師、伝道者である。
　本主日はこの遣わされている者たちの使命を高揚すると共に、それらの人々のために祈る主日である。
　聖職者、教役者はその聖なる使命のために起ち、信徒たちはこれらの人々を信頼し、その必要を充し、後顧のうれいなく福音のために雄々しく前進せしむるときに教会はその使命を達成し得るであろう。

主題　道を備うる者

福音書　マタイ　一一・二－一〇
使徒書　Ⅰコリ　四・一－五
旧　約　マラキ　三・一－六

祈り　主イエス・キリストよ、始めにくだりたまいし時、主にさきだちて、道を備うる使いをつかわしたまえり。願わくは今主の奥義をつかさどる仕えびとをめぐみ、もとれる者の心を正しき人の悟りに帰らす力を与えて主の道を備うることを得させ、再びくだりて世をさばきたもうとき、我らを御心にかのう民となしたまえ。主は父と聖霊とともに一体の神にましまして世々統べ治めたもうなり、　アーメン

を迎える我らにとって最も大切な事だからである。

主題　聖言に聴く

福音書　ルカ　二一・二五—三三
使徒書　ロマ　一五・四—一三
旧約　ミカ　四・一—七

祈り　我らを教うるために聖書をしるさせたまいし主よ、願わくはこれを聞き、これを読み、ねんごろに学び、かつ味わいて魂の養いとなさしめたまえ。また願わくはみ言葉によりて強められ、耐え忍ぶことを習い、み子によりて授けたまえる限りなき生命の望みをいだき、常にこれを保つことを得させたまえ。主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。　アーメン

説　教

もう数年前のことである。私がチャプレンとして奉職していた京都のH女学院短期大学に一人の女の小使さんが居た。取り立てて言う程の長所も短所もなかったが真面目に仕事に励んでくれていたように思う。

或る夜のこと十時少し過ぎであったであろうか、或る会合が終って急ぎ足で四条通りを歩いているとF銀行の大きな建物の影に、ローソクの灯をつけて小さな机を前に座って客を待っている易者があった。よく見るとそれは婦人の易者であり、驚いたことにはその婦人は私たちの学校の小使さんだったのである。

それから間もなくこの小使さんは学校を辞め、其の後は堂々と昼間でも神社の境内などに店を張っていると言うことであった。

大都会になればなる程、易者の数は多い。その易者がどのような素性の人であるかと言うことも知らず、多くの人々が（溺れる者がわらをつかむ）ように、このローソクの灯に吸い寄せられて行くのである。

「うつそみの常なき見れば世の中に心つけずて思ふ日ぞ多き」と万葉の歌人がうたっている。

この世は、うつろい易き世であり、無常の世界である、そして、そこに身を置く我らの人生もまた無常であり、しかもこの世に頼るべきものは何ものもないのである。我らの人生には真のよりどころと言うべきものがないのである。

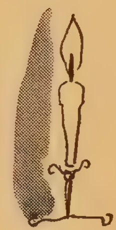
そしてこのような不安は結局、死につながるところの不安なのである。

この世界は人間以上の、否人間には想像もつかないような、大きな力によって支配されているように思われる。しかしその大きな力とは何であるか。人間にはその力の正体をつきとめる知恵も能力もないのである。

人は、これを呼んで運命という。我々はこの運命という黒い魔手に抵抗できないとするならば、せめて少しでも早く自分の運命についての消息をきき、これによりよく対処したいという、いじらしい心が、あのほの暗いローソクの灯のもとに吸い寄せられてゆくのである。

主イエス・キリストは、われわれが黒い魔手であると考えていた人間の運命というものに光を与えて下さったのである。明かな光のもとで、われわれが確め得たもの、教え示されたところのものは、無気味な魔の手ではなくて、温い慈愛の手であり、神の摂理であっ

主を迎える備え



一二月二四日

主日の趣旨　降臨節の最後の主日、従って降誕節を迎えるための霊的な備えをなすべき最終の機会である。教会暦を守る慣例では日没から日没までを一日とするので、一二月二四日の日没からいわゆるクリスマス・イヴの礼拝が始まり、午前零時を期して降誕日の第一回の聖餐式が始められるのが普通である。

主題　主に在る喜び

福音書　ヨハネ　一・一九—二八
使徒書　ピリピ　四・四—七
旧　約　イザヤ　四〇・一—八

祈り　主よ、御力をあらわして我らのうちにきたり、大いなるいきおいをもって助けたまえ。我らは罪に妨げられて、おのが前に置かれたる馳せ場を走るに、いたく苦しむゆえ、豊かなる恵みをもってすみやかに我らを救いたまえ。主は父と聖霊とともに一体の神にましまして世々限りなく統べ治めたもうなり。　アーメン

説　教

降誕節は文字通り目近かに迫っている。今夕はクリスマス・イヴを迎えようとしているのである。お祝いの準備は、ほぼ完了して、あとは、今夕から明日へかけての降誕日を待つばかりであろう。

しかし、ここではやる心をおさえて、神の御前に静まり、もう一度最後の心の備えをしたいと思うのである。

今年もクリスマスがやって来た。信者も未信者もクリスマスを待っている。しかしクリスマスを迎える喜びは一様ではないと思う。

クリスマスに洗礼を受ける人たちや、洗礼をうけて始めてクリスマスを迎えるような人たちは、恐らく一般の人たちとちがった喜びをもってこの日を迎えるであろうと思う。

同じく信者であってもクリスマスを迎える喜びは、その内容と言うか性質と言うか、とに角、喜びそのものに相当の相違があるのではないかと想像するのである。

そして、この事は非常に重大な問題をはらんでいると言うべきであろう。

御老人の中には信者としてすでに数十回クリスマスを迎えている人もあるであろう。そして年毎に新しい感謝と感激と感恩の心をもってこの日を迎えている人もあるであろう。そうかと思うと何の感激もなく唯習慣的に今年もまたクリスマスを迎え送ると云う人もあるように思うのである。

聖パウロは本日の使徒書のはじめに「あなた方は、主に在って喜びなさい」と言っている。

先にも述べたように、未信者でも、極端に言えばキリスト教のキの字も知らないが、しかもクリスマスを待っている人がある。プレゼントが貰えるとかパーティーに招待されていると言ったようなたぐいである。

過日、伊豆長岡で聖公会関係学校のチャプレン・宗教主任らの会合が開かれた際、談たまたま学校におけるチャプレンの地位如何と言う話題に移った時、一先輩が「チャプレンは総長の上位でもあり小使の下位でもある」と言われたのは、けだし名言であった。

本日の使徒書の冒頭に「人はわたしたちを、キリストに仕える者神の奥義を管理している者と見るがよい」とある。

ここに聖パウロの聖職者としての自覚が示されている。聖職者はキリストの下役（N・E・Bによる）であり、僕べである。キリストに仕うる故に、すべての人に仕える僕べであり。神の奥義を管理する者である故に管理者としての権威と責任を有する者である。

そこで第一に要求されることは、管理者としての職務に忠実であることである（使徒行四・二）

神の奥義の管理者に託されているのは何であろうか、言うまでもなく、第一に福音であり、第二にこの福音の恩寵に与らしむるための具体的な手段として定められたサクラメントである。

世には福音主義とか聖奠主義などと言う言葉がある。しかし、真に福音に忠実である者は聖奠を軽視することは出来ない、と同時に福音あってこその聖奠であって、聖奠を重視して福音を軽視することは考えられない。寧ろ聖奠は福音の中に包寧しているものである。

「管理者に要求されているのは、忠実であることである（四・二）

伝道者は何を措いても福音を宣べ伝えることである。果してこの事が忠実に行なわれているであろうか。伝道者の数は増加しているが回心者の数がその割合に増加していないと云う統計の数字は何を物語っているであろうか。

しかも年々増加しているのは不参信徒である。聖職者は伝道者であると同時に善き牧羊者でなければならない。

主は「善き牧羊者は羊のために生命を棄てる」と仰せられた。キリストの下役である牧師、伝道者にこの決意と懸命の努力があるであろうか。

降臨節の主題は「主は近し」である。主が再び降り給う日が近づいている。我らは安閑として時を空費することは許されない。時を得るも得ざるも励まねばならない。主の日は聖職者にとっても審判の日である。聖職者は聖職者として主の審判をうけねばならないのである。

風に揺ぐ葦のように時代の風潮や原爆の爆風に動揺してはいけないか。柔らかい着物を心ひそかに憧れてはいないか。

時代が求めているもの、そして我らの主が期待し給うのは預言者以上のものなのである（福音書）

× × ×

本日は聖職者が自らを糾す日であると同時に、信徒らが聖職者のために祈る日である。上述のような尊い重い職責と使命を完遂することは人の業ではなく、神の祐助によるほかはない。

されば、聖職者のために常に熱き祈りをささげる信徒団をもつ教会は栄え、たとえ聖職者が伝道に熱心であっても、信徒の禱援のない教会は栄えない。

聖パウロは「私をさばく方は主である、だから主がこられるまでは、何事についても、先走りをしてさばいてはいけない」（四・四）と言っている。牧師をさばくことは主に委ねて、信徒は聖職者のために祈ることを第一とすべきであろう。

婚約中の娘の懐妊と云うことは相手の男にとっては全く致命的な衝撃であったに相違ない。しかしヨセフはこのことを公けにすることを好まず、ひそかに離縁しようとした。日本語訳聖書には（夫ヨセフは正しい人であったので……）と訳されているが、この「正しい人」と言うのは寧ろ（義と愛の人）とでも訳すべき言葉である。N・E・Bでは、このことばをくだいて、、分り易く、ヨセフは道義の人（或は節操の人）であったが、同時に彼女の恥が暴露することを好まなかったので（彼女を救うために）ひそかに離縁しようと考えた。と言う風に意訳している。

このあたりを読んでいると、キリストの受肉降誕の裏面に、このような犠牲がはらわれている事を思い、ヨセフの寛大な心に打たれるのである。

と同時にヨセフの心境をありのままに記した福音書の記録は聖子が聖霊によって処女マリヤに宿りたもうた事実に対する一つの証しと言うことが出来よう。

第二は主の使いの証言である。

婚約者マリヤの懐妊の事実を前に煩悶懊悩しつつあったヨセフに主の使が現れ「マリヤの懐妊は聖霊による懐胎であるから安じてマリヤを妻として迎え入れるように」との御告げを蒙ったのである。

この事によってヨセフのまどいは解消し、信心深いヨセフは主の使いの言葉を畏れかしこみ、マリヤを妻として迎え容れたことは言うまでもない。かくてヨセフはマリヤと共に聖子を養育する至上の光栄に浴することとなったのである。

第三の証しは、預言者のことばによるものである。

イザヤ書七・一四に曰く「主はみずから一つのしるしをあなたがたに与えられる。見よ、おとめがみごもって男の子を産む。その名はインマヌエルととなえられる」と。

福音記者がキリストの受肉降誕の事実を語りつつあった時に、彼の脳裡に鮮かに甦って来たのがこのイザヤの預言であったのである。「その名はインマヌエル（神われらとともにいます）と称えられん」と。まさしく神はイエス・キリストにおいて受肉し、人性をとって我らのうちに来りたもうたのである。

最早、神は我らの幻想の世界に住み給わず、受肉せるキリストとして現実の世界に来って、親しく我らに語りかけ、我らと交りたもうこととなったのである。

降誕節は実に天と地とが結び合されし日であり、神の支配が地上に完うされんために、救いの御手が差しのべられた日である。

ちょっと一言

クリスマスをひかえて悩みがある。その一つ、分級の時間がつぶれるということ。つぶれるのではない、クリスマスの準備のために、その時間がつかわれるのであるが、所定の教案を、予定どおり進めることができないという心苦しさである。それも、重要なクリスマス学課でありながら。

もっとも降臨節に入ってクリスマスに備えての聖日をすごすのだから、たとえ祝会の劇の練習であってもよいのではないかと思う人もあろう。それもそうである。

しかし、実際は、キリストの降誕を待ち望んだことが何故か、降誕は何のためかを教えるクリスマス単元が正しく教えられていないと後の新学期にも影響する。御注意　御注意

キリスト教徒がクリスマスを迎える喜び（そしてこれが本当のクリスマスの喜びであるが）それは、やはり主に在る喜びでなければならない。

クリスマスを遠い昔の、過去の出来事の記念として祝うのであれば、あまり深い意義があるとは思えない。

キリストが神の栄光をすて給うたのは、このわたしを神の栄光にあづからせて下さるためであった。

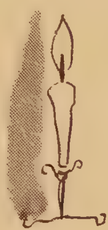
主イエスがベツレヘムの馬小屋に呱々の声をあげられたのは、神を離れて獣の匂いのする卑しい生活に身を委ねていたこの私を救はんがためであった。

このキリストの犠牲と贖いの恵みによって、わたしの新しい人生が始まったのだ。旧い私は既に死んで主イエスが、わがうちに生き給うのだ。

このような信仰に生かされている者にとっては、クリスマスは年毎に全身全霊にみなぎる新しい感激をもって迎えられるのである。

降誕後主日（降誕節主日）

インマヌエル



一二月三一日

主日の趣旨　クリスマスは降誕日の当日だけこれを祝い、その真理を学ぶには余りに大いなる事実である。従って教会では降誕日から主イエス命名日（受割礼日）までの八日間をクリスマスの事実とその真理について学ぶべく定められているのである。

本主日は受肉降誕の主日であって福音書も使徒書も共にこの真理に就て学ぶのである。特禱は降誕日のものを用うる慣例である。

主題　**受肉したまいし神**

福音書　**マタイ**　**一・一八—二五**
使徒書　**ガラテヤ**　**四・一—七**
旧　約　**イザヤ**　**一一・一—五**

祈り　全能の神よ、ひとりの御子を我らに与え、これをして人性をとり、この時、清きおとめより生まれしめたまえり。願わくは我ら恵みによりて再び生まれ、神の子とせられし者、日々聖霊によりて新たになることを得させたまえ。父と聖霊とともに一体の神にまします主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。　アーメン

説　教

主イエスの為したもうた奇跡の物語りを読んで躓く人が多い。しかし奇跡中の大奇跡は神が人となりたもうたこの事実である。この事実を信ずるならば他の一切の奇跡についての疑問は氷解するに相違ないのである。

本日の福音書はこの受肉降誕の事実について三つの証しを述べている。

第一はヨセフの証しである。マリヤとヨセフとは許婚の間柄であった。当時の婚約は法律上、結婚と同じような責任を伴うものであったようである。ところが未だ結婚に至らない先にマリヤの懐妊と云う驚くべき事が起り、その事実が人々の噂にものぼるようになった。

図しているのである。それはまさに新たなメシヤへの告白であった。

(I) ザカリヤへのヨハネ誕生の告知マリヤへのイエス誕生の告知

(II) マリヤへのイエス誕産の告知

(III) マリヤとザカリヤの妻エリサベツとの会見

(IV) ヨハネの誕生と割礼、それにつづくザカリヤのその息子の誕生への預言的祝福。

(V) イエスの誕生と割礼、それにつづく、幼児の宮もうでの際のシメオンとアンナの預言的祝福

(VI) 最後にイエスの少年時代の物語りが、少年期と公生涯のかけ橋となり、福音宣伝の神の国を中心とするバプテスマのヨハネの先駆による伝道史に物語りが移ってゆく。

(2) それは何事もない、日常の祭司の務めの日であった。二四の班に分かたれた祭司の、アビヤ（第八班）の組に属するザカリヤは慣例に従い抽籤の結果、主の聖所に入って香をたいていた。彼は石女の妻エリサベツと共に「神のみまえに正しい人であって、主の戒めと定めとを、みな落度なく行っていた」いわゆる敬虔な信仰の持主であった。その香をたいている時、突然彼は神の啓示に接する。彼は非常に恐怖の念に襲われつつ、且つ心さわぎ、その啓示に耳を傾けるのである。啓示の内容は次の如くであった。彼の祈願に神は応え給うて一子を与える。それはエリヤの如く万の事を更める使命を以って、来るべき救主の先駆者となるであろうというのである。これは余りにも彼の思いを越えた事柄であった。確かに子の与えられる事は彼ら夫婦の熱願する所であったであろう。そしてその信仰の敬虔の故に、イスラエルの救われん事も更に大いなる熱願であったに違いない。然し此の個人的な事柄と、神の支配の福音の先駆者としての神の使命という救贖の課題とは、よく一つである事を予期出来ない。それが個々別々の願いであった所に、天使のこの言葉が彼にとって突然のものであり、且つ唐突に感ぜられる点があったのである。そこで彼はこの事の自分にあり得べからざるを訴え、この時来らば成就する神の啓示を否定する事により、その不信の故に唖とせらるるにいたった。

一体此の物語りは何を私共に示そうとするのであるか。それはヨハネの歴史上の位置、而してザカリヤの不信の問題、この二つであろう。先ず(I)について。洗礼者ヨハネとイエスの関係の問題はむつかしい。けれども、受洗、神の国の宣言、エリヤと関連ずけられてのイエスへの人々の評価、更にヨハネの殉教と共に始まる福音宣伝の開始等を眺めてゆくと、そこにはどうしても、歴史上の二人の出現が、神の経綸の要の一点で、深く結びついている事を思わないではいられぬ。事実ヨハネ自身のイエスへの告白、更に又イエス自身のヨハネへの評価は、右の事の理解が、両者の間に儼然として存在する事を認めさせる。この点に立ってヨハネの立場、位置を明示せる所のものが、まさにこのガブリエルの告知の全内容であったという事が出来るであろう。いわば、文体は旧約によくみられる後事預言として。

(13節) 男の子の与えられる事とその名（ヨハネとは、神は恵み深し、又神の恩賜を意味する）、(14節) それは個人としての喜びと楽しみばかりでなしに、多くの人々、即ち全人類の歓喜となる。（ここに神の召しの二重性の問題がある事に注意しよう。私共がクリスト者として召されるという事は、同時に何らかの賜を通して神の言を宣べ伝えるべく召されているという事を意味するのだしパウ

聖書研究のための毎週の教案



第三期　キリストを告白する教会

教会はキリストのからだであって、地上にあっては一つの有機体として、たえず生きて活動するものである。その活動によって、救い主キリストを告白しつづけているものである。

この教会の奥義は何か。その活動はどうか。教会に連なっているキリスト者の信仰生活とはどんなものか。キリストを告白することはどのようなことか。終末の希望はどうなのか。そうした問題を、ルカによる福音書、エペソ人への手紙、ペテロの第一の手紙、ヨハネ黙示録などの聖書研究によって学ぶのが、この期の中心課題である。

単元　一　クリスマス

設定の理由　クリスマス単元は特に、ルカによる福音書によって、イエスの誕生を学ぶことになっているが、扱い方によっては期題とは若干はなれるかも知れない。しかしテキストは、教会の礼拝で昔から用いられてきた、ザカリヤ・マリヤ・シメオン等の讃歌（カンテイクルスをとってあるので、教会のキリスト讃美として、礼拝との関連を考えながら、取扱うことにしたい。

ザカリヤへのおとずれ

ルカ　一・五―二三

(1)　個々に入る前にルカ一〜二章のイエス誕生までの神の準備の業を語る一大叙事詩の意味を一応学んで置く事は、全体の讃歌を学ぶに当って必要の事と思う。ルカによる福音書の目的は、異邦人に福音を読ませる事にあった。聖書中唯一人の異邦人著者としての面目は此の一点にある。そのために文章を誌すに当って、当時行われていた文学の様式を用い、本場のギリシャ語を以って、飾りけのない簡素な報告書風のマルコ、又荘重な儀式文風のマタイ伝とは異った美しさ、物語の巧妙さをあらわしている。そこにはヘレニズム文化の中に福音が切りこんでゆく為の世界文学の資格が自ら備わっているというべきであろう。特に一、二章には多少資料的にヘブル的余韻を残しながら、イエスの誕生並にその歴史を、世界史の唯中に定着せしめ、暗に救済史と、此の世界史の関りを示そうとしている点に私共は注意を払う必要があろう。もしこの一、二章の存在がなかったとすれば、よく福音は世界への進路、異邦への進みゆく道すぢを有効に持つ事は出来なかったかも知れない。

この一、二章はザカリヤへの告知とヨハネの誕生、マリヤへの告知とイエスの誕生を、一つの調和した構成で進めつつ、イエスの公生涯への足がかりを求めている。いわば旧約と新約の継目の役割を果しながら、一方救済史の観点よりの旧約の再理解というものを意

(2) イエスの再臨は、彼自身の言葉にもあるように「律法や預言者を廃するために来た、と思ってはならない。廃する為ではなく、成就するためにきたのである」。まさにキリストの此の世に来るに及んで、旧約の預言はここに成就し、新約の世界に入る。即ち神の救済史の中心は、イエス・キリストにあるのである。そして又福音書は既に行われた復活の出来事の光に照らして誌されている。従ってマリヤの讃歌はその光の下に照らし出された旧約の預言の最後にその位置を占めるものであるという事が出来るであろう。預言における神の此の世への働きが、確かな歴史の上で準備され、起りつつある事実、又福音の胎動としてあるときに、福音の光によくせし者のあの旧約の預言への感動は、まさにマグニフィカートとして告白せざるを得ないであろう。従っていわゆる処女受胎も、まさしく福音書において、預言的に解釈された歴史、時間の世界に展開される神の秘儀として学びとられねばならぬのである。そのような意味に於てマグニフィカートは、飽くまで「マリヤの讃歌」であって「マリヤへの讃歌」とはなり得ないのである。カトリックに於てはこの讃歌は特に尊重され、毎日晩禱の際に用い、他の歌とは区別されて、特に声高く、かつ徐やかに歌われ、その間聖壇で香が焚かれたりするというが、そこには少なからず讃歌の信仰からの逸脱があることを認めねばならない。旧約の恩寵の成就が歴史的事実となって働く事への讃美として、この讃歌のリズムを、私共は学ぶ必要がある。

(3) (46・47節)「わたしの魂は主をあがめ、わたしの霊は救主なる神をたたえます」。感謝の言葉よりも先に、斯る秘儀を彼女になし給うた神への讃美が、彼女の全身よりほと走るのを見る。感謝とは少くとも自分に起った事柄の強調であって、その瞳は自己求心的、下降的である。不幸に出会うと感謝を忘れ、与えられた賜に対しては、それが自分に満ちている事を誇るようになり、生そのものを与え給いし神を忘れるのが弱き信仰者、私共一般の姿である。「たたえる」とは上昇的である「マリヤは神に魅し去られ、自らその恵みある慈愛深い御旨の中に高められるのを感じる」(ルター)。

(48節)「この卑しい女をさえ、心にかけてくださいました。今からのち代々の人々は、わたしをさいわいな女というでしょう」自分の卑しさの低さにまで顧み給う主の恩寵への讃美である。この謙虚は神への愛と信頼との力でありその源泉である。

救の全てはこの顧みより生れる。人々の自己への賞讃は、唯自分の如き無きに等しき者すらが、神に用いられる時に、救の最大の器たり得る。まさに神の恵の恩寵の故に。(49節)「力あるかたが、わたしに大きな事をしてくださったからです。」自己に臨む神の御業と賜。少なき言葉の中に満ちる、霊と真実とを以ってなされる讃美である。そこに「大きな事」という言葉が、躍如としてはりを持っている(50節)「そのみ名はきよく、そのあわれみは、代々限りなく、主をかしこみ恐れるものに及びます」。その業をなし給うお方は「力」ある方(エペソ三・二〇、ヨハネ五・一七参照)「聖なる方」(主の祈)即ちいやしき中にその業をなし給うとも、その聖はけがされぬ。その救はイエス・キリストに於て成就し、それで終ってしまうものではない。これらの美わしき言葉を以って彼女の、主とその業への讃美は終るのである。それも全て詩篇の言葉によって。

かくて「あわれみ」にひきつづいて(51節)「主はみ腕をもって力をふるい、心の思いのおごり高ぶる者を追い散らし(52節)権力ある者を王座から引きおろし、卑しい者を引き上げ(53節)飢えている者を良いもので飽かせ、富んでいる者を空腹のまま帰らせなさいます」と、人間の六つの状態に対する六つの神の業を語る。あた

ロの召命観とあわせて考察したい)。(15節) その故は (γάρ) ㈠「主の前に大いなる者、即ち神の使命にある時、よく人の前で価値なき姿に思われても、実は大いなるものなのであって、特に彼ヨハネは最後の預言者として、キリストの先駆者として一層偉大である。㈡「ぶどう酒や強い酒をいっさい飲まぬ」それは一見ナザレ人を思わしめるが、むしろ「聖霊に満たされている」事を強調する為の一種の否定の形における強調であろう。それは又禁欲生活を示している。㈢「母の胎内にいる時からすでに聖霊に満たされている、その使命は予め神によって附与せられている所のものだ(16節) 先に先駆者としての一般的使命についてのべ、つづいてその姿を示した後ここにいたってその公的使命の具体的内容を語るのである。それは「罪のゆるしを得させる悔改めのバプテスマ」(マルコ一・四)を施す事により、マラキ三・一の「道を備え」(イザヤ四〇・三)て、民を主なる神に立ち帰らせん、が為に、イエスに導く事である。それはまさに、先に申したように「万事を元どおりに改める」(マルコ九・一二)と同じ使命を担って、救主の預言と先駆者の位置をその霊と力とによって果す。そして神と人との正しき義の関係を回復せしめる事に準備をなすというのである。これが生れて来るザカリヤの子への神によって定められた使命であった。

(Ⅱ) ついでザカリヤの不信である。人間は過去の支配せる存在だ。自分の過去経験によってよく未来を計り得ると思う。子の与えられん事を願うとも、与えられる事の告知が起り得た時、決して信を以ってうけ入れぬ。のみならず、それが予期以上の事柄である場合には尚更である。キリストによる私共への恵みと私共人間の態度は、まさしく、此の姿ではあるまいか。未来にある救に自らを没入せしめる事なしに、私共には時の飛躍は、起り得ないのである。

マリヤへのおとづれ

ルカ 一・二六―五六

(1) ザカリヤへの告知があってから六ヶ月目に、再び天使ガブリエルは、今度はいと貧しき処女その名はマリヤ、の所に来て、救主の降誕と、子をみごもる事を知らせる。その告知の内容は (Ⅰ) 男子を生む (Ⅱ) その名はイエス (神は救なりヨシュア) (Ⅲ) そして超人格的存在者で (Ⅳ) 神の子と称えられる (イザヤ九・六以下参照)。(Ⅴ) その職務は、メシヤとして立てられ給う事により (Ⅵ) 永遠にイスラエルを治め、その神の国はその支配と共に永遠に続くであろうというのであった。マリヤの怖れははなはだしかったが、再度の御使の祝福により、この御告げに全幅の信頼を寄せ、斯ることの己れになれかしと祈るのである。

そこで舞台はマリヤとエリザベツの会見に移り、共に神によって選ばれしもの、聖霊による相互の感応が、マリヤをして一篇の詩を歌わしめる。これが従来「マリヤの讃歌」(magnificat) と呼ばれる讃歌である事は言うまでもあるまい。従来この句をマリヤ自身の即興詩であるとか、古ユダヤ主義キリスト教の讃美歌、更に又ユダヤ教の讃美歌であったという種々の説がある (確かにサムエル上二・一―一〇との間に著しき文体の類似あり、又クロステルマン等によって指摘せられるように旧約との密接な対比もあり、次のザカリヤの Benedictus と共に右の説が主張せられるに充分な点もある)。いづれをとると強く主張は出来ないが、唯ルカによって此の箇所に置かれている点に深い意味の存在している事を私共は注意したい。

節）又神の憐みを通じて契約により誓い給いし如く（71節）地上の仇や敵の手より救い出すという事で、彼の表現に関する限り、地上的、政治的なものを一歩も出ないが、そこで神の民とせられしものの姿は、きよく、正しく、懼なく神に仕える生涯である。思うに、此の救済への確信、これが、真の未来への希望となる時に、その生命は躍動するのである。今日の時代は危機を語る事多く、此の真の救済の宣言を、単なる楽天主義と嘲笑する気風が、教会の内部にすらないと断言する事は出来まい。

　後半にいたり、ヨハネの使命がうたわれる。（Ｉ）「いと高き者の預言者」それはキリストの預言の最後の者たるの意味である。（一・三二参照）。元来預言者とは神の言の担手であり、神とその歴史の進行の一切に自己を埋没するのである。従ってそこには鋭い終末観に根ざした実存的な信仰が脈動する。ヨハネの預言者の最後的な位置こそ、実は救主の先駆者の位置であった。既に旧約の黙示に於て、特にマラキ書三・一、又イザヤ四〇・三にあるように、王の行進の露払いの役目こそ、真の王の到来の予告である。幼き日、思えば昔語りだが、天皇の地方行幸の先導の重々しい空気の中に来るべき天皇の、その人格とは別の感覚を味わったものだが、エリヤの姿を以って来るこの先駆者ヨハネこそは（マラキ四・五参照）、「主の大いなる恐るべき日」の到来を厳かに示すものであったというべきであろう。その日に来るものとは（Ⅲ）「罪のゆるしによる救」であり、彼の使命は、それを民に知らせる事にあった。此の一点が要となって、大きく、旧約の救と新約の救への回転が行われる事が予示せられている事を見逃してはならない。（Ⅳ）それは真に大いなる神のあわれみによる事であったが、このあわれみにより（Ⅴ）「日の光が上からわたしたちに臨む」のである。まさにそれは神による第二の創造である。天地創造に於て一切のもの先立って、栄光が照り輝きし如くに、神の新な生命の光が、一切の暗黒に照りわたる。此の神の霊の働きにより、そこに平和の道が開かれる。

　私共は、ここに暗と光とが、絶望と希望とが、より後者の比重の大なる中で語られている事を見逃してはならない。そしてその一切が、神の御手にある事をも!! 私共は実は、此の平和の告知者とせられているのではなかったか。

救い主誕生

ルカ二・一―二〇

(1)　主の降誕を告げる天使の言葉の後に「おびただしい天の軍勢が現われ、御使と一緒になって神をさんびして言った、

『いと高きところでは、神に栄光があるように、
　地の上では、み心にかなう人々に平和があるように』」

この讃歌の意味の深さは、イエス誕生の姿と対応する事なしには、よく私共に理解されないであろう。では二章一―七まで語られている内容とは何であろうか。

　（Ｉ）それは神の子の誕生である。救主の降誕の告知である。まさにイエス・キリストは一人の人間として、此の世に生れ給うた。（Ⅱ）それも一般的・抽象的な人間ではなくして、ローマの治下、イスラエル人という特別な民族の中に、即ち具体的な歴史の領域の中で、人であり給うたという事である。終末的出来事として、神の御子である事によって、このイスラエル民族の一人として生れ給う

かもエレミヤ記九・二三以下のように。第一の業、憐み、第二の業霊的な傲慢を打ちくだき給う。第三の業、高き者を低くし給う。第四の業、卑しき者を高うし給う。第五の業、貧しき者を満たしめ給う。第六の業、富める者を空乏の中に打ち棄て給う（ルター）。

最後の（54・55節）の両節を通じて、今来らんとする神の約束の成就を前に、再び父祖の歴史に立ち帰り、そこに示される神の救済の線、即ち「選び」と「縮少」の確かなる点を、己が身に起りつつある神の憐みの業として確認する。それが、特に自分を含めてイスラエルに成就する事を!!

ヨハネの誕生

ルカ　一・五七—七九

(1)　神の約束の時が来た。エリサベツは月満ちて立派な男子を生んだ。それは彼女の喜びであるばかりでなく、近所の人々にとっても喜びであり、共に主が大いなるあわれみを垂れ給える事を祝うた。イスラエルにあっては、子の名は一般に誕生の際与えられるものである。ルカは多少ギリシャの習慣に左右せられた為であろう、割礼の日と同一に行われたように誌している。いずれにしても、親族の要求は父が年老いていた為であろう、従来ならば、祖父の名をつける所をまげて父の名と同様にザカリヤにしようとする。然しエリサベツは、夫の言葉によって知っていたであろう、ヨハネという名をつけるように要求した。親族は習慣を固執して尚ザカリヤという名をつけようとする。然し命名権は父にあるわけで、父ザカリヤの意見を問うと、彼は書板を持ってこさせそれに、自分の言はんとする言葉を誌した。板の文字に曰く「その名はヨハネなり」と。先の天啓に接した際の彼にくらべると、真に決定的な態度であった。ルカはその事を「すると、立ちどころにザカリヤの口が開けて舌がゆるみ、語り出して神をほめたたえた」と記述している。彼への神の罰は終った。その開放の一声が、神の深き恩恵への讃美であった。それは感謝以上の事柄である。この口開かれた事柄は、真に異様な出来事であった。小さき山里いたる所にこの噂は広がった。イエスにあったと同様に、この神のかくれた秘儀は、かく山里の一部に、まずしき人々の間で、素朴な期待と嘱目の中に次第にその根を下ろしていったのである。それは神が人の歴史と結び給う際、常にあらわされる特別な恵の配慮であった。主は彼と共にあった。

(2)　かくて父ザカリヤは聖霊に導かれて、神より託されし言葉を語る。これが今日 Benedictus と呼ばれている讃歌である。これは二つの部分（68〜75、76〜79節）に分けられる。前半は神の救済の業の預言への確認であり、後半は生れ来りし幼児ヨハネの使命で、一一節以下の天使ガブリエルの言葉と深い関連を持っている。前半は特にそれぞれ引照されている旧約の聖句を参照せねばならぬ（68節）旧約的には政治的なイスラエルの救いで、「民を顧み」の言葉の中に、申命記にも見られるように、あの出エジプトの神の恵への感謝と回顧とがある。此の歴史的な確実な事実に立って、罪の贖いを通じて、再び真の神との関係が回復せられ、神の民として立つ事が期待されている。ザカリヤの語調の中に、唯かに永遠の未来への、いつか来るであろうという心情よりも、その迫り来る救の時への切迫した信仰のあらわれている事を味わわねばならぬ（69節）その道はダビデの家より出ずる。それはイスラエル一般の確信であった。その救の内容とは（70節）預言者によって預言されし如く（72、73

と同じように「わたしの目が、今やあなたの救いを見」且つ自分のかけがえのない信仰体験としてその救を持っているにもかかわらず此の老人の様に、神の支配し給う歴史、それを貫く救済史の観点に立とうと、果して努めているかどうかという事。案外この様な時人の肉迫をさけて、クリスマスさへ、気分的に、そして新しい年への覚悟と昔き時の回顧の中に、自分の問題を誤魔化してしまっているのではないかと思うのである。

(2) さて両親は、幼な子にイエスと名づけると、四〇日間のきよめの期間が過ぎる早々、この子をつれて、律法の定むる所に従い(出エジプト一三・二、一二、一五)幼な子を主に献げると共に、レビ一二・六―八の規定によって「山ばと一つがい、または家ばとのひな二羽」を献げて犠牲の供物とした。まさにいと貧しき供物ではあったが、幼な子を献ぐるに勝る他の何らの供物も、又存しなかったというべきであろう。丁度その時、エルサレムにシメオンという老人がいたが、この、律法を正しく守り、神を畏れかしこみ、且つメシヤの到来によって、イスラエルの救われん事を切望していた人物が、聖霊に感じてその示しのまま宮の中に入り、ちょうど両親が祭礼せんとする所に出会った。彼はこの幼な子に神のあわれみを直感する。そしてこの幼な子を腕に抱き、神をほめたたえる。(29節)「主のつかわす救主にあうまでは死ぬことはない」と示されたその事を、今目の前に見、此の年齢に、此の時を与えられ、その瞳に、その事実を目の当りうけとめて、今こそ平安の眠りにつく事が祈れる。筆者の牧する教会で、長き信仰生活の中で、その夫の救われる事を望みつつ、自分の生涯にその事の起る事を祈っている老婦人が居られる。頑固な夫だが、自分が死んだら葬儀は筆者にという注文の由、信仰への接近の第一歩。このシメオンのまち望んだ心境、そして、それの与えられた喜び、それはかくもあらんかと思うのである。(30節)かの第二イザヤによって預言せられた「神の救を見る」(イザヤ五二・一〇)という事が、今や自分のものとなったからだ。

(31節)この救は万民の前にお備えになったものだという。この救の表現の変化が、ザカリヤの民族的・政治的理解(一・六九以下)からずっと離れて、真のキリストによって与えられる救、即ち宇宙的世界への拡大にまで、至っている事を見ることが出来よう。此の一句によって、ルカはまさに、異邦人への福音書としてその基礎を固めているのである。けれども、この救は、たやすい方法で来るものではない(34節)それは、審判として起る。それも、イエス・キリストは審きを行い給うのであるが、而も、彼自身が、その判決を自ら身に負い給うことによってである。信ずるものには救の岩、不信な者には、この福音は、躓きの石となろう。これがこれから負うべき幼な子の歩むべき、僕の道であった。まさにその審きの歩こそ、救済の歴史そのものに外ならない。これはここに出て来た、新なキリストの道、又、その姿であった。

筆者は思う。自分の子供が生れた時、既に四代目の信仰を受けつぐ者として(果して青年にいたり、自分の信仰を告白して、親の信仰より独立するか、又信仰を捨てるか、又キリスト教的雰囲気に甘んじるかは別として)、負うべき、信仰の僕の従順、斗いを予見しなければ居られなかった。信仰の遺産の伝達は、この負い目の祝福なしには、本当に果し得ないものなのである。いわゆるクリスチャン・ホームの安易さの中で、意気地のない子弟を、いつの間にか育て、信仰一代限りの悲惨を味って来ているのが現状の中で、老シメオンが、うけとめている事を学びたい。

たという事は既に、救の預言の成就として、旧約の世界を超克する。そしてそこから、新な救と選びの線が出発する事を認めねばならない。（Ⅲ）彼の誕生は「布にくるまれ、飼葉おけの中」であった。それは「客間には彼らのいる余地がなかったからである」と聖書は注を加えている。それは人間の集合よりの疎外である。それこそ人間、この神の子が人となり給うた、人間のありのままの姿ではなかったろうか。と関連して、この人間の姿こそ、神によって審かれた、いわば、不従順と不貞実な民の姿に外ならない。元来イスラエルは、神によって選ばれた民である。神の恩恵に生きんが為に、律法の遵守が要求される。然し、その与えられた自由の故に、此の道を求めようとせぬ。事情が、平盤より脱して、深い社会の変動と関り合いを持てば持つ程、尚更である。まさに「異郷」の姿に外ならない。即ちイエスは、この「異郷に赴かれた」のであり「被造的・人間的存在の卑賤へ赴く」姿、それは「罪ある人間との一従って破滅に陥つ人間との、一致と連帯への赴く神の子の道。その受肉の道」としてこの世に生れ給うたのだという事を指しているのである（バルト）。ここに子としての従順と謙遜とが、示されている事に注意したい。（Ⅵ）最後に主の栄光の下に語られたという事。それはこの事が神の永遠の計画の最大の要であるという事である。この事を除いて、神の歴史に対する計画は存在し得ないのである。この業の主体は僕となり給うた神御自身である。

(2)　事をここまで眺めて来ると、何故天の軍勢をしてかの讃美をうたわしめなければならなかったという問いも、自から解けるに違いない。即ち御子の誕生に当り、仮に預言の成就として事柄を受けとめても、然し尚「何ゆえ神は人となったか（Cur Deus homo？）」という問いは残る「即ち何のために、この主は僕となり給うたのか。何のために、神の御子が、具体的にあのような従順を捧げ、そしてそのあり給うが如き方として、御自身を示し明らかにし給うのであろうか。何のために、彼は、父の自由処置の意志に対して、同様な神的自由をもって服従し、あの異郷に赴く道を歩み給うたのであろうか」と（バルト、和解論、邦訳一〇〇頁）。それに対する答えの一切が実は一四節の言葉の本来の意味であった。この世の出来事は、明らかに、神御自身にとって、意義づけられているからである。バルトの言葉を以って、説明にかえよう。（同一〇一頁）

「主はその高さと深さを持った神性の内的豊かさの全体を、外に向って実証し、啓示するために、そのようなことを欲し、また行い給うのである。ことに、御自身によって創られたこの世が、父の似姿としての御子において、自分自身の原型を、その中心において所有し、認識するために、主はそのようなことを欲し、また行い給うのである。従って、主がそのようなことを欲し、また行い給うのはこの世の中における御自身の栄光のためであり、この世なしには存在せず、孤独な神であろうとし給わない御自身の意志を、実証し、知らせるためである」。

シメオンの頌

ルカ　二・二二―三五

(1)　クリスマスを終り、私共は今や、年の最後の聖日の日課に立ってシメオンの頌を味わおうとしている。筆者はここに二つの意義を味うのである。一体私共の時間感覚は、この師走の一日に臨んで実際どんな感覚で迫って来るであろうかという事。そしてシメオン

神から人間に向かって手が指しのべられるのだ。矢じるしは、人間から神に向かって上に向いているのでなく、神から人間に向かって下に向いている。

バベルの塔の物語りが、創世記にある。人間が神に向って作られた塔は、人間のごうまん、欲望のしるしであって、ある一定の限度にまでは達するかも知れないが、やがては必ず崩れるものである。神の前に立つ人間は、罪人であり、肉体という制限の中に生きている有限のものである。この人間に対して、神はご自身をお示しになり、救いの道を開いて下さる。聖書の示す真の宗教は、創世記の最初にある、神が始めに天地を作られたことから始まって、神が人間を救うために、ご自身を啓示される宗教である。人間は、このご自身を啓示される神を信じ、これに仕えて行かなければならない。それでは、神はどういうように啓示されたのであろうか。日課の聖句は、このことを簡明に教えてくれる。

一つは預言者によって、人間に語られた。預言者というと、占い師のように、未来のことを預言する預言者をすぐに連想するが、聖書では、予言者でなく、預言者という字を用いている。預は、銀行にお金を預金している、というような時に用いるあずけるという意味がある。つまり、神は人間にみ旨を知らせるためには、人間を通し、人間の言葉を通さなければならなかったので、ある人々を選んで、その人々に神のみことばをお預けになった。だから預言者というのは、神のみ霊の力を受け、神のみことばを託されて、人々に神のみ心を伝える人であった。だから預言者は、あらゆる時に、いろいろな方法で、人々に神のみことばを語った。国王が、間違った政治を行い、行為をした時には、命がけで何ものも恐れずに直言してその間違いを指摘した。すべての民が偶像礼拝を行った時にも、たった一人で、痛烈にその愚かさを攻撃した。

しかし神の啓示の最大のものは、神の子が地に生を持たれたキリストの降誕であった。神が人の形をとりたもうたということは、今や神がみずから人間と同じところまで下りて来て、その姿を示し、直接人間の言葉をもって罪のある人間に、語りかけたもうたということであった。いやそれだけでなく、ご自身が血を流して、人間の罪のあがないのため、十字架にかかられたという事実は、人間の言葉では完全に説明することは出来ない、すばらしい神のみ旨の啓示であった。キリストは「わたしを見た者は、父を見たのである（ヨハネ一四・九）と言われた。キリストを見ることによって神を見、神の愛のすばらしさを知ることが出来る。キリストこそ、神の啓示の極致である。啓示という字は、あらわし示す、という意味である。神はキリストによって、はっきり私たちにその姿、その愛、そのみ旨を示して下さる。キリスト教は、人間から神への上向の宗教でなく、神から人間への下向の、啓示の宗教であるゆえんである。

待ち望む者　ルカ 一・六七―七九

先週学んだことは、神は啓示の神であり、キリスト教は啓示の宗教であるということであった。しかしいくら神はご自身を啓示されるからと言って、啓示を受ける人間の側が、さざえのように入口にふたをし、太陽が輝いているのに部屋の雨戸を閉めているように、自らを閉ざしているなら、その啓示を受け入れることは出来ない。

信徒学級



み子による啓示

神の啓示

ヘブル　一・一―三

無神論者は別にして、多くの人々は宗教の必要性を強調する。何でもいいから信仰しているということは、その人に心のより処を与えるもので、ちゃんとした人生をおくるのには、宗教はぜひ必要だというのである。それはいわゆる精神修養程度の意味しかもっていなくて、他の人にはその必要性を説くが、自分はいっこう無頓着な人が多い。つまりその宗教というのは、倫理道徳のようなもので、教えを聞き、教えられたことを実行してみることであり、この宗教はどうも生活が堅苦しくておもしろくない、あの宗教はお金を取りたてるのが上手でこまる、この神さまはなかなかご利益がある、というように、自分に都合のよいように選択し、評価することの出来るものである。それではまるでデパートの食堂のショーウインドウにならべられている料理ではないか。

自分の好きなのを選ぶだけでよいし、気に入らなくなれば捨て去ることが出来る。また宗教は自分の修養のための道具のようなものであるから、自分で気に入った神を考え、神はかくあるべきものである、本当の神なら、そんなことはあり得ない、等と、神を限定してしまう。

ドイツにヘルマンという神学者がいた。この人の著書の中に、こんなような意味のことが書いてある「仏陀やマホメットや孔子は、かなたを指さして、お前たちは、この道をこのようにして努力し進むなら、あの目的地にまで到達することが出来ると言って人間の行くべき道と目標を差し示す。しかしキリストはそうではない。キリストは手をのばして、はるか向こうの目標を指し示すかわりに、ご自分が人々の前に立ちはだかって、手を拡げ『さあわたしに来なさい。わたしこそ道であり、まことであり、命である』と言われる。キリスト教が絶対唯一の宗教であるゆえんはここにある」というのである。

麓の道は多くても、同じ高嶺の月を見るというような意味から、どの宗教でも、やがては同じ目標に達するもので、たいした変わりはないというのなら、人間は適当に自分の気に入った宗教を選び、あれかこれかと、楽しくてよさそうなものを取ればよいかも知れない。しかし宗教の本質が、人間中心で、人間が考え、つくり出すものではなく、神が中心であり、神が人間を作られたことが前提となって、神がご自分を人間に示されることであるならば、事情はすっかり変って来る。人間が神に向かって手を指しのべるのではなくて

望的な大衆の、わらにでもすがりたい気持ちを現わしているというのは間違いであろうか。

罪の問題がそのままにされたまま、どのように人間が賢そうにふるまってみても、今の時代の不安や苦しみは、ますます大がかりで深刻になるだけであって、そこには極まりのない暗が拡がっているという外はない。

いま私たちはアドベントのシーズンを迎え、キリストの降誕を迎えようとしている。キリストは人生の最も根本的な人間の罪を処理し、人間を新しくして生きる力を与えて下さる。科学が進めば進む程、人間の心は重大な力を及ぼすものである。今こそ私たち現代人は、今の時代を正しく把握し、キリストの十字架の恵みを受け、キリストに最大の希望を置かなければならない。私たちはキリストを迎えるために心の扉を開き、心の奥のすみずみにまで、キリストをお迎えしなければならない。

キリストに私たちの希望を置きキリストに従い、キリストによって生きる経験をするならば、今まで希望を置いていたものすべてが、違った尊い意味を持つようになって、人生に新しい価値を持つものとなるのである。

神ともにいます

マタイ　一・二二—二五

インマヌエル——神われらと共にいます、この名前は、イエスの信仰の姿をよく示しているとともに、信仰生活の真の姿をよく示している。

信仰という字は、どこから来た字であろうか。手許の「字源」をひいてみると、信という字は、まこと、あきらか、きわまる、もちうる、しるし、わりふ、つかい、おもし、まかす、おとずれ、等の意味の説明がある。にんべんに言、つまり人間が言葉をもっているので、信という字であるのもおもしろい。また言に人格を持たせたものがまことであり、しるしであり、おとずれであるのは、なかなか深いふくみがあるではないか。しかしそうしたものをもって仰ぐのが信仰であるという時、やはり日本人の持つ信仰というものの考え方が正直に現われているように思われる。

日本人一般の持つ信仰心は、自己を中心にして信仰の対像の前に立ち、それを拝し、それに従い、それを学ぶことによって自己の不完全さを補い、自分が強められ、幸福を得ることを求めることが多い。仏教の中でも禅宗に見られる悟りやあきらめ等は、徹底的な自己追求であって無の中に悟りを開くことが信仰に当たるとすればそれは虚無主義であって、神はないのであるから、神を信ずることが信仰であるという概念からは、だいぶ遠いようである。普通の場合、神社仏閣に参拝して、手を合わせ、頭をたれて祈願をすることが信仰の姿であるとされている。いったいその場合には、何が行われているのであろうか。自分より大きな力、不思議な力を持つものの前に出て、その力の影響を受け、自分に出来ないことをしようとするのも一つではないか。自分は不幸である。悲しみや苦しみが渦巻いている。なんとかこれを切り抜けるために力をかして欲しい。そのような祈願をしている。つまり自分のために利益になることを求める。神仏の加護を祈るとか天祐神助を祈るとかという表現がしばしば使われるが、こうした態度こそが最も信仰的であるとさ

自らを閉ざすというのは、どういうことであろうか。まず人間の持つ利己主義、わがまま、高慢であって、自分を誇り、自分を信頼して、目に見えない霊の世界、神の世界のことに目を向けず、神のみことばにも耳をふさいでいることである。

救い主の先駆者ヨハネは、キリストの来臨を告げるにあたって、先ず大きな声で「悔い改めよ、天国は近づいた」と叫んだ。悔い改めるというのは、われを失れてこの世の生活に熱中し、人間の作りだした文明や科学に深酔し、人間を誇りとし、高慢な思いにみたされている自己をふり返えり、自分の真実の姿をはっきり認めて、神の世界に目をそそぎ、神のみことばに耳を傾けるために、これを告白することである。閉ざしっぱなしになっている部屋の戸を、思い切ってさっと開放して、外からの真実の光りをぞんぶんに受けることである。

待ち望むということは、不安な気持ちがどこかにありながら、大きな希望に胸をふくらませながら、将来を信じて期待をしている状態であろう。現実かどのように幸福に見えても、さらに大きな希望を持つことが出来たら、それはすばらしいことであろう。しかし現実か望みのない、みじめなものである場合、そこに大きな希望が与えられるならば、これを待ち望む心は、必死であり、それだけに生きるより所を求めることであろう。

先駆者ヨハネの父ザカリヤは、宮に仕える祭司であった。祭司は民の指導者であり、知識階級に属するものであったから、当時の時代の苦しみをよく知っていたに違いないし、一人一人の魂の苦悶を知っていたに違いない。ザカリヤの頌を読んでみると、そうした気持ちがうかがわれる。彼は「神がわたしたちを敵から、またすべてわたしたちを憎む者の手から、救い出すために、救いの角をお立てになった」と歌っている。ザカリヤの考えによれば、現状は、敵の手の中にあり、憎む者の手がわたしたちを捕えている、というのである。あの純真な処女マリヤが、イエスをみごもったことを知った時「主はみ腕をもって力をふるい、権力ある者を王座から引きおろし、卑しい者を引き上げ、飢えている者を良いもので飽かせ、富んでいる者を空腹のまま帰らせなさいます」(ルカ一・五一—五三)と歌っている。富める者、権力ある者が横暴を極わめ、一般大衆をしいたげていたことがわかるし、当時の社会の中にあった苦しみや矛盾が容易に想像される。そこには必死の待ち望む心だけでなく、救い主への大きな希望があふれている。

今の時代にある私たちはどうであろうか。十九世紀から二十世紀にかけての合理主義、科学万能主義、唯物主義、理知主義の横行は多くの人々の希望を変えてしまった。人々は人間の力を信じ、自分の理性をたより、この世的な幸福やユートピヤを求めるようになった。科学の前にはいっさいの精神的な事柄が後退し、科学的な証明や根拠によらなければ、何ごとも信じられないような気風が、多くの人々を捕えてしまった。しかしそれらは果してどれだけ人類に希望を与えたのであろうか。科学の証明や理性の判断は、果して人間にもほんとうの希望を与えているであろうか。

今の時代は、終末的な恐怖につつまれているようだ。死の灰が降ってくるうちはまだよいとして、人類の破滅を呼びそうな戦争の不安と危機は、いつもまわりを取りまいている。愛しあって行かなければならない人間同志が、それぞれ自分の考えばかりを主張しあって憎しみや闘争が社会の中に渦巻いている。現代人は希望を持っているつもりでいながら、案外希望を見失って、暗中模索しているのではないか。ことにわが国における新興宗教の隆盛は、そうした絶

言は肉体となる

ヨハネ　一・六—一八

神のみ子イエスがこの世に生まれられた、クリスマスである。どのようにわたしたちはクリスマスを迎えたらよいのであるか。親しい者の誕生日には、プレゼントを交換し、食卓をともにして心からこれを祝う。それはその人がこの世に生まれでてきたことをあらためて感謝し、年々生長して、立派な人間になっていくことを祝うのであろう。また偉人の誕生日も祝う。これは生きている人だけでなく、死んだ人でもそうだ。それは偉人がこの世に生まれて来たことを覚えて、その人の偉大さを思い起こし、感謝の念を新たにするためであろう。それでは二千年昔生まれたイエス・キリストはどうであろうか。ただ救い主イエス・キリストが生まれたもうたことに対して、感謝の念を新たにし、キリストの地上におけるご生涯を思い起こすためなのであろうか。もちろんそうした意味も少しはあるであろうが、それは極めて小さな一部分であって、もっと大切な、現在に深い意義を持つものがそこにあるからである。

ヨハネは、他の福音書記者と違って、キリストの誕生を、哲学的な表現を用いて深い意味を持たせながら、ロゴス（言）の受肉として述べた。これはすばらしい聖ヨハネの信仰告白と言えるであろう。

ロゴス（言）とは何であろうか。言というものは、人間の世界においては、お互いの考えを表明し、意志を知りあうためのものである。一つの言葉がそこにある時には、だからそこには言葉を発した者、書いた者の思想なり、意志なりが存在している。ヨハネは福音書の冒頭に「初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった」としるしている。これは、神がただ漠然とした存在であり、大きな神秘的な力であり、ヌミノーゼ——恐るべきもの、であるというようなものでなく、はっきりした意志を持ち、人類を愛する愛を持ち、この宇宙をすべおさめたもう経倫を持っておられる方であることを教えている。神は神殿の中にまつり込まれ、人間に仕えられていられる方ではなくて、もっと積極的に人間を愛し、人間にめぐみを与え、人間を罪の滅びから救いたもう方である。けれどもそうした考えと意志を持っておられる目に見えない神は、どのようにしてこれを人間に知らせ、救いの道を示そうとなさるのであろうか。

わたしたち人間は言葉を持っており、目や耳を通してこれを伝達する。神はご自分のみ旨を人間に知らせるのには、やはり人間の目や耳を通す必要がある、そのためには肉体的な方法をとりたまわなければならない。水に溺れている人がある場合、陸にいていくら気をもんでいても、大きな声を出したとしてみても、どうなるものではない。大切なことは、自ら水の中に飛び込んで、その男の手を捕えてひっぱりあげることなのだ。

「言が肉体となった」というのには、そうした意味がある。人間には捕えることのできない神のみ旨が、イエス・キリストの受肉という形において、わたしたちに知られるようになった。知られるようになった、というようなのん気なことではなくて、馬小屋に生まれカルバリーの十字架に血を流したもうまで、その口の言葉によりその生活を通して語りたもう言葉により、血を流すあがないの事実

れている。ところが自分が努力はすることがあっても、自分を反省し、自分のうちにある不幸や苦しみの原因になるものを探ぐることは、はなはだまれである。精神修養ということがあるが、これも、一つの人間的修養努力のことをさしていて、信仰というものも、ただこの修養のための道具であるとしか考えられていない。道徳的に立派な、修養のたりた人物というものはあるが、それは人間的な努力と修養によるものであって、だれでもがその境地にはいることが出来るわけではない。だからつまるところ信仰というものは、ご利益を求めるためのものであって、多くの宗教といわれるものは、ご利益宗教と言われるゆえんである。

ところがキリストの教えられた信仰は、どうであろうか。キリストはニコデモに「だれでも、水と霊とから生れなければ、神の国にはいることはできない」と言われた。自分はそのままで、神を仰ぎ神を礼拝するのではなくて、まず新しく生まれかわらなければならない、というのである。パウロは「罪に対しては死んだものであり、キリスト・イエスにあって神に生きているものである」とローマ人への手紙六章で教えている。つまり聖書に教えられている信仰は、自己に死に、神に生きることである。ルターは「信仰とは己れに栄光を帰することをやめて、神に栄光を帰することである」と言った。それは自己中心の生活をやめて、神中心の生活をはじめることである。それは、前に述べた御利益宗教、自己の幸福のための道具としての宗教、人間の精神修養のための宗教、等とは、根本的に違っている。それはちょうど天動説から、地動説への転換のようなものである。この宇宙は地球を中心に動いていると信じて、すべての世界観、天文学を組みたてていたものが、地球がうごいている、しかも太陽を中心にして天体の運行が行われていることを知って、根底から世界観が変化したような、コペルニクス的な転向と同じであろう。

それではその信仰の構造はどのようなものか。まず、人間は自己を反省し自覚をする。そうすると人間としての限界を持った、罪人である自己を発見する。そうしたものがある限り、私たちは神を喜ばせ、神を迎えることはできない。そこでこの自己の真実を告白し罪をざんげして、新しく生まれかわらなければならない。そしてキリストの十字架のめぐみをうけ、洗礼によって新しい人が生まれる。この新しい人は、自己の主張を通さないし、自己の幸福や喜びを求めない。なぜなら、この新しい人には「キリストがわたしのうちにあって生きている」という体験があるからである。わたしたちは神を喜ばせるのだというが、それはわたしたちのうちに神が宿っていて、神がわたしたちをみ旨を行うために用いて下さるからである。

「神われとともにいます」これはイエス・キリストのお姿であった。神われとともにいますということは、わたしたちの体験でなければならない。神さまに従って、あとをついて行くのでなくて、神によって新しく生まれ、神とともに生き、神とともに働くとき、わたしたちの生活は、すっかり変って行く。それこそ真の信仰の姿でなければならない。キリスト教は、教理や理性や頭の中の宗教ではなくて、神共にあるという、体験の宗教である。わたしたちがクリスマスを迎える意味は、ここにある。それはキリストを一人一人が心のうちに迎えることなのだ。

も同じように与えられるものである。神のおそろしさ、神の怒り、神のきびしい審判、というようなことが言われる。神は正しい方であり、義なる方であるから、不義を憎み、退けたもうことはたしかだ。しかし不義を憎み、怒りたもう時にも、神の愛はいつでもそこに働いている。愛するがゆえの怒りであり、憎みである。キリストは世をさばくためにきたのではなく、世が救われるためであって、キリストを信じる者はさばかれない。信じない者はすでにさばかれているというのである。さばくとか、さばかれるとかいうのは、キリストの側の問題ではなくて、人間の側の問題であることがわかる。生けるみ言葉であるキリストを拒否し、耳や目をふさいで、これを聞こうとしない者、自己中心の生活をして、心のうちにみ子を迎えようとしない者、そうした者は、すでにさばかれている。つまり福音というのは、限りない救いの愛であるが、それは人間の前に決定的な意味をもって投げ出されているので、人間はこれを受けるか拒否するか、信じるか信じないか、によって決定的な運命がそこに展開されるのである。

ヨハネは、福音書の始めからそうであるが、光と暗という言葉をよく使っている。光はすべてのものを照し出す。光をあてると、いままできれいな空気であると思っていた部屋の中に、小さなごみがいっぱい浮遊しているのが明瞭になる。光りは直線に進むが、何かしゃへい物があると、それにさえぎられて、向う側を明るくすることはできない。光の中の生活は、自分だけでなく、前にある他の者を認めてこれと関係を持ち、深く知りあい、愛しあって、共同の生活をおくらせる。そして光の中にあっては、自分をごまかしたり、かくしたりすることはできない。

暗はどうか。暗の中にあっては、自分がすっかりかくされてしまうから、他の人が見えないかわりに、自分のことも人に知られることがない。遠くの行く手も見えないし、自分の立っている姿もわからない。どんな悪いことをしても、自分の慾望や悪事を行っても、だれも気づかないから大丈夫という安心がある。だから自分のことだけを考え、利己主義に徹し、自分勝手なふるまいをして満足できる。闇屋とか闇商売という言葉があるが、これも暗の生活であることは確かである。

キリストは光である、というのはヨハネ的な表現である。たしかにキリストは暗の中に光がてるように、人間世界の中に光としてはいり込んでこられた。この光の恵みを全身にあびた者は、自己の罪を認め、罪をあがなわれて、光の中を歩むように、堂々として胸を張って歩くことができた。ところが、この光に照されることを恐れいやがって、暗から暗へと逃げまわり、大きな障壁を築いてこの光をさえぎろうとした人々が多くいた。多くいたという過去ではなくて、これは多くいるという現在でもある。光を逃げまわるのは、自分のおこないが明るみに出ることを恐れ、いやがっている人々で、光の中の生活にたえることが出来ない。ヨハネは、この状態を、さばかれている姿であるとしている。

わたしたちは、この一年果して光の中を胸を張ってあるけるような生活をすごしてきたであろうか。肉体を持った人間が、光の中を歩るけば必ず裏側には暗い影がつきまとっているものだ。弱いわたしたち人間の地上生活には、たとえ光の中に生きていても、暗い影がつきまとっているというのは悲しいことである。しかしそれでも光を求め、光の中の生活をつづけて行くことによって、福音の喜びはわたしたちのものとなり、輝かしい未来が待ち受けてくれるのである。神の愛はすべての人を救う、これはすばらしい約束である。

（ルーテル神学校教授　**青山四郎**）

により、その生涯をかけて、びしびしと人間の心にせまるように語りかけられたし、今なお語りかけておられるのである。

キリストは「わたしを見た者は父を見たのである」と言われた。たしかに父なる神は、キリストによってご自分の意志をはっきり人間に示し、キリストを生ける言葉として、わたしたちに語りかけておられる。このことはクリスマスを祝うことの、最も中心的な事実である。

ところが、人間の言葉は不思議なものである。たとえば、地上には無数の国語があって、自分の知らない言葉で話されると、何のことかさっぱり理解することができない。また遠くはなれていたり、耳が聞えなかったり、目が見えなくて字を読むことができなかったりすると、言葉の意味を通じさせることが出来ない。キリストは生ける言葉としてこの世に現われたもうたが、人間は色々の理由からこれを正しく捕え、これを聞き、理解することが出来ない「彼らは見ても見ず、聞いても聞かず、また悟らないからで。あるこの民の心は鈍くなり、その耳は聞えにくく、その目は閉じている。それは彼らが目で見ず、耳で聞かず、心で悟らず、悔い改めていやされることがないためである」とキリストが言っておられる通りである。ヨハネはこのことを「光があって世にきた。彼は世にいた。そして世は彼によってできたのであるが、世は彼らを知らずにいた」といっている。ここにこの世の悲劇がある。

けれどもこれは、ヨハネが更に言うように「言は肉体となり、わたしたちのうちに宿った。わたしたちはその栄光を見た。それは父のひとり子としての栄光であった、めぐみとまこととに満ちていた」のである。クリスマスを祝う理由の第二は、これである。それは今日の世界に言葉として、語りかけたもうキリストを迎えることであり、そのことを多くの人々に告げ知らすことである。クリスマスを祝うことはひそかな祝いでなく、宣教の意味をこめた声高らかに叫ぶ祝いでなければならない。

神の愛と世の不信

ヨハネ　三・一六―二一

ルターは、ヨハネ三・一六の聖句を、聖書全体の内容を一口で言ったものであり、聖書の要約、福音のすべてであると言った。今日は今年最後の日曜日である。この一年を反省し、福音の言葉に直面して、自分というものをはっきりさせることは、新しい年を迎えるために、極めて重要なことであろう。

福音とは何か。この言葉はよろこびのおとずれとも言われている。これは、昔イスラエルがバビロンに捕えられていたが、いよいよゆるされて故国に帰えることがきまった時、伝令が早くエルサレムにこの解放のよろこびのおとずれを伝えに帰って来た。その時に用いられた言葉だそうである。暗黒の中にあって争い、さまよい、絶望していた人々に、救いのおとずれが伝えられた。そのおとずれは何か「神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである」という言葉にすべてが含まれている。

ひとり残らず救われなければならない。これが神のみ心である。神の愛はアガペーである。この愛は、好き嫌いをするような愛ではない。どのような罪人にも、神に逆き、神を捨てようとするものに

す」（ルカ一・二六―三八）

一二月二四日　「わたしの魂は主をあがめ」（ルカ一・三九―五六）

十二月二四日夜　「神はその民を顧みてこれをあがない」（ルカ一・五七―八〇）

さんびかは、九五、九六、九七が「待降」のうたとなっているからこれを歌う。

クリスマス・トリーを飾る時

家庭でクリスマス・トリーをいつ飾るか。本当ならアドヴェントの第一主日に飾るのだが、クリスマスまでに木が枯れてしまうので第三主日の一二月一〇日あたりがどうであろうか。クリスチャン・ホームでは、三月の節句びなと同じく、クリスマス・トリーの装飾品は一式そろえてしまっておかねばならない。それをとり出し、必ず子供たちと一緒に飾りつけること（大人だけでさっさとやってはいけない）。出来あいの品の他、子供が幼稚園などで製作した鶴やローソクを飾ってもいい。

この他床の間の生花、玄関の樅の木の輪などにクリスマス色を出す。

家庭用クリスマスのメッセージ

さていよいよ家庭クリスマスを守る夜となって、一同が食卓に坐ると、電灯を消し、ローソクの灯で以下の如き礼拝を守る。

さんびか　きよしこの夜（一〇九番）又はもろびとこぞりて（一一二番）

聖　書　ルカ二・八―二〇

メッセージ（私は前週の週報に、牧師から家庭へのクリスマス・メッセージを出し、家庭クリスマス礼拝の時に読むようにさせているが、それができないところでは、以下の文を読んで下さい）

「今夜は私共の家庭にイエス・キリスト様をお迎えするクリスマスです。一九六一年ももう直ぐ終ろうとしていますが、今年をふり返えっていろいろなことがありましたね（入学、就職、病気、死など家庭で起った出来事を語る）。でも一同こうして無事に一家安全にクリスマスを迎えることができることをまず神さまにお礼を申したいと思います。

日本が戦争に敗けてから一生懸命に国の復興に尽して来ましたが、そのおかげで近頃は前よりは豊かに暮すことができるようになりました。けれども豊かになると、つい心の中にスキが出来るようになります。まずこんな暮しは当り前だ、もっと豊かになりたい。誰々さんの家ではこんなものがある、といって今日の私たちの生活に感謝する心を失ってしまうものです。こうした心のスキがある時に、私共はもう一度、なぜイエス・キリスト様がお生れになったのか、イエス様はどんなところでお生れになったのか考える必要があります。

イエス様はその伝道の初めに、ガリラヤの会堂において

「貧しい人々に福音を、囚人に開放を、盲人には光を、打ちひしがれている者には自由を与え、主のめぐみの年を告げ知らせる」（ルカ四・一八）

と申されました。イエス様はその生涯を貧しい、困つた人々のために捧げて、十字架につけられて亡くなられた方でした。

私共には時々心のスキが出来、油断が生れます。世の中にはまだ沢山めぐまれない人がいるのです。こんなクリスマスの御馳走を食べられない人もいますし、又世界中が核爆弾と戦争の危険にさらされているのです。神様はこのようにいつまでも憎しみ合い、貧しい、困った人々のために御子キリストをこの世に誕生させ、早く世界中の人がイエス様を心に迎え、イエスさまのように、世に平和をもたらす人になってほしいと願っていられるのです。クリスマスはこのように私共の姿を反省して、そこにそぎたもう神さまの愛を受ける時だと思います。馬ぶねに誕生なさったイエス様を思いながら、わが家にキリストを迎え、来年も無事にクリスマスを迎えることができますように祈りたいと思います」

祈　禱

（岩村　信二）

今月の家庭科

家庭クリスマスのために

家庭クリスマスを全教会員で

「クリスマスを家庭で」という呼び声は近年次第に徹底して来た。東京ではクリスマス・イブに売れるクリスマス・ケーキの数は二百万個といわれるから、九百万人口の殆んどすべてがケークを買っていることになる。しかし果してどんな家庭クリスマスが守られているのであろうか。キリストがいない、ただドンチャン騒ぎのお祭りに終っているのではないか。

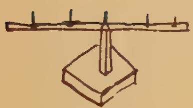
あなたの教会では、各家庭でどんなクリスマスを守っていますか。教会の肢である全家庭で守っていますか。一度調査する必要がある。教会はその日のために一日完全に空けて、家庭でゆっくりクリスマスを守れるように配慮したい。今年は一二月二四日が日曜日であるから、イヴはその夜になるが、日曜日の夜、教会で祝会やキャンドル・サービスを開くところが多いから、一日ズラすか、早めるなりする指示が必要である。

クリスマスはアドヴェントから

クリスマスは一二月二五日の当日だけで守るものではない。その四週間前のアドヴェント（待降節）から守られるべきものである。今年は一一月二六日（日）がアドヴェントの第一主日に当る。イエス・キリストの誕生が決して突然のことではなく、旧約の時代においてメシヤの形で待降せられていた故事にならい、又、子供たちがクリスマスを「楽しみ待ち望む」ために、更に「待望」は「終末」を意味することを覚えて敬虔に四週間を送りたい。

アドヴェントの家庭行事

ローソク　まず図の如きローソク台を用意する。五本のローソクがつくようなものは容易に得がたいだろうが、近頃キリスト教書店で売り出すようになった。何とか「家庭の聖化」のためにも、これぐらい奮発してほしい。



一二月　三日（日）　朝　真中に一本
十二月一〇日（日）　朝　二本
　　一七日（日）　朝　三本
　　二四日（日）　朝　四本
　　二四日（日）　夜　五本全部

（真鍮の燭台がなければ、木の棒でも作れる。図を参照）



ローソクは白のものより赤、桃色などや、色がついていた方がよい。飾りローソクならなお結構。こうして一週間に一本づつローソクがふえて、全部で五本ついたらクリスマスだということは、子供にも大人にも待望の喜びを与える。

聖書日課　ふだん家庭礼拝の守れない家でも、せめてアドヴェントの四回の日曜の朝だけでも、聖書を読み、讃美歌を歌い、祈りをすることを心がけよう。

聖書の日課

一二月三日　「目をさましていなさい」（マタイ二五・一―一三）

一二月一〇日　「時が来れば成就するわたしの言葉」（ルカ一・一―二五）

一二月一七日　「わたしは主のはしためで

は異っていました。けれども、彼女がヨセフという信仰ぶかい、正しい人の妻であったことにちがいはありません。そして妻としてのマリヤも、母としてのマリヤに劣らず、りっぱなものであったに相違ありません。

それは、未だ、彼女がヨセフと結婚しない前のことでした。彼女は聖霊の唐突な啓示をうけた時、天の使に「どうして、そんなことがありましょうか」といぶからざるをえませんでした。しかし、結局は「わたしは主のはしためです。おことばのとおり、この身になりますように」と答えています。それは、ほんとうに、婚約者の前に、人知では説明のできない重大なことが生起しつつあったのです。きよいおとめにとっては、まさに、死を呼ぶほどの厳粛なできごとであったのです。けれども、彼女は、彼を信じて、最後にはすべてを神のみ旨に託したのです。

夫婦のあいだでも、お互いが、ただ自分の主張や弁解だけをし合っていたのでは、決して楽しいものではありません。すべてにおいて、すべてを知っておられる神の前に、いっさいを正しして生きる良心がお互いに必要です。そこには秘密は少しもありません。

そして、また「神のはしため」になりきって、そこから相互の信頼と思いやりが生じてきます。夫の「どれい」のようになって、その気嫌をとり結ぶことだけに浮き身をやつすのではありません。神意を第一にして、夫に仕えるのです。このような婦人であるならば、必ずその夫を正しく生かし、真に幸いな人としていくことができます。

まれども、マリヤは、ただやさしい、おとなしい妻であっただけではなかったと思います。あの不朽の大文学といわれる「マリヤの頌」(マグニフィカット・ルカ一・四六―五五)をみれば、旧約から聖句が選ばれているのですが、その選びかたが実にりっぱです。堂々とした見識が反映しています。このような賢明な婦人は、家を治めることにおいても、世事を処理することにおいても、抜かりなく行い、夫は安心してすべてを任かせることができたにちがいありません。

人としてのマリヤ

マリヤは母であり、妻である前に、まず女であり人でした。人としてのマリヤの面影を示す聖書のことばはたくさんあります。マリヤの頌をみても、「わたしの魂は主をあがめ、わたしの霊は救主なる神をたたえます」といっています。どんなに精神的な婦人であったかがわかります、その「あがめ」「たたえる」ものは神でありました。おうよそ虚栄などとは縁遠い婦人でした。人の「おがめ、たたえる」ものが何であるかによって、その人の性質が明らかにされるといわれますが、彼女はこの意味において、まことは気高い人でした。それをいっそう裏づけるものは彼女の「わたしは主のいやしいはしためです」という意識でした。なんという謙虚な美しい心でしょう。そしてまた、なんという神への絶対服従の心でしょう。こんな徹底した信仰の人があったでしょうか。後世の美術家が、彼女を理想の美人に描こうとしましたが、むしろその美しさはこの心の美にあったはずです。ペテロが、「あなたがたは、髪を編み、金の飾りをつけ、服装をととのえるような外面の飾りではなく、かくれた内なる人、柔和で、しとやかな霊と朽ちることのない飾りを身につけるべきである。これこそ神のみまえに、きわめて尊いものである」(第一の手紙一三・三、四)といいましたが、おそらくマリヤのことを思い浮べながらこの手紙を書いたのではないかと想像している人もあります。

多くのキラを飾る宮殿の中の女性でなく、ず、才たけたラビ(学者)の家の娘でなく、ナザレの片田舎の彼女が尊い使命のために特別に選ばれたのには、確かに選ばれるだけの十分の理由があったと思います。

山内六郎

マリヤに學ぶ

聖書　ルカ一・三九―五五。

クリスマスが、本年も。やってまいりました。今月は、神から独特の意味において、お選びをうけたマリヤについて学びたいと思います。

母としてのマリヤ

マリヤは母性の典型といわれます。神の子イエスをやどし、これを育てる任務を全うしたということにおいて、彼女の右に出る母はこの世にないでありましょう。

母としてのマリヤについて、学ぶべき点は、たくさんあります。だが、わたしたちは、ルカ二・一九の「しかし、マリヤはこれらの事をことごとく心に留めて、思いめぐらしていた」ということばについて考えてみたいと思います。「心に留めて、思いめぐらす」という一句に、深い母心がのぞかれるような気がします。

まず、「心に留める」とあります。ルカ二・五一にも「母はこれらの事をみな心に留めていた」とございます。前のは、羊かいたちがイエスのご誕生後に尋ねてきた時のことです。のちのは、一二歳のイエスが、学者たちの前で驚嘆に値いする問答をされ、うちに帰っては両親によく仕えられたという時のことです。彼女は、決して、自分の子のかわいさや、りこうさ、またよくできることを自慢してまわったり、軽々しく吹聴するようなたちの母親ではなかったのです。そうしたことを、ことごとく、ヂッと心に留めていたのです。なんという奥ゆかしいことではありませんか。

心に留めて、さらに「思いめぐらした」とあります。彼女は、静かに、神の御約束をかみしめたのでしょう。どんな母親でも、自分の腹を痛めた子どもを抱いて、思いめぐらさないものはないでありましょう。いったい、この子はどんなものになるだろうか。どうか、りっぱな、そしてしあわせな人になってくれるようにと、愛児の将来について思いめぐらさない親はないと思います。しかし、その思いめぐらしは、神との関係にまでいたらねばならないものなのです。どんな子どもであつても、神のみ旨によらずして、この世に生れ出たものはひとりもいないからです。ひとりびとりが、みな神からの使命を帯びて、生れてきたものであるからです。

とにかく、「心に留めて思いめぐらす」母は、愛情のこまやかな母であり、また同時に賢明な母であるということがわかります。それは、自分の子どもをよく理解する母の態度を示しています。よく、「母は理解する」といわれます。たとい、父親が恐り、世間が誤解しても、「おかあさんならば、話せば、きっとわかってくれる」という信念を子の心に植えつけることができれば、ただもうそれだけで、教育は大成功であるといってもいいでしょう。

マリアは、子のことを、深く心に留めて、思いめぐらしながら、育てました。軽卒に、お天気ひとつで、ほめてみたり、しかってみたりするような母親ではありませんでした。ほんとうに、信頼できる母でした。このような母のひざもとで育てられた子どもは、どんなに仕合わせだったことでしょう。

妻としてのマリヤ

人は、母となる前に、妻であります。マリヤのイエスにおける場合は、世の常のそれと

CS部ニュース

教育週間献金 もう一息

今年の教育週間献金は、「東南アジアへお医者さんを送ろう」ということで各派の教会学校をはじめ、キリスト教学校、キリスト教幼稚園から続々と関係団体宛に献金がよせられましたが目標の二百万円にまだ程遠く、締切りの十二月末までには、何とかこぎつけたいものと願っています。

現在（一二月二〇日）教会学校部には、六七万一千円がよせられており、キリスト教学校教育同盟には四九万五百円、キリスト教保育連盟には、十万にみたないという報告が来ております。

当教会学校部宛の教会学校のは三三二校で、昨年のシュヴァイツァー献金の時の七七八校から見るとかなり下廻っております。未だ整理の都合で御送金下さってない教会学校は十二月末日まで受付けておりますので、何卒よろしく御送り下さい。

こどもリーフレットは 美しいカバーで保存を

各学年別に出ている教会学校の教材「こどもリーフレット」は、毎号つづれるようになっていましたが、しばらく品切れていたカバーが新しく入荷しました。きれいな表紙をつけて一年間をとじ込んで用いて下さい。

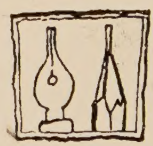
クリスマス礼拝のための プログラム用紙

原色刷りのクリスマスプログラム用紙を教会学校部で発行いたしました。一枚三円、一〇〇部以上一割引きいたします。地方からの御注文は送料の他に速達料をそえて下さい。ただし地方書店では、神戸聖文舎、名古屋聖文舎、熊本聖文舎、大阪キリスト教書店、日曜世界社、横浜ましみず社で取扱っています。

WCCE副会長 ミセス・ハインツ来日

世界キリスト教教育協議会の副会長であるハインツ夫人は、ニューデリーのWCC大会に出席の途中立寄られた。夫人はワナメーカと並ぶ鑵詰王の夫人であるが、キリスト教教育がどんなに大切であるかを常に強調して努力しており、教会学校部山北理事長、松野副理事長、松下立大総長、NCC山田総務幹事と懇談した。

へんしゅうしつ



◇冷たい風がビルとビルの間を吹き抜けて行く中に、もうサンタクロースの姿をしたサンドイッチマンが歩いています。まだ十一月だと云うのに……。クリスマスになったらきっと色あせたサンタになるのではないか。

◇今冬の婦人服モードに毛皮を使うのは世界各国での流行ですが、銀座のあるおしゃれの店のウィンドウに毛皮のスカートをつけたマヌカン人形が飾られているのには驚ろきました。ステキダなど思うよりも、ふと頭に浮んだ『荒野に呼ばわるものの声す』。流行は昔にかえるものとは云え、クリスマスをひかえてヨハネの姿が町に現れるとは？

◇今年のクリスマスセールは、どこのデパートでも家庭でクリスマスをと名うって宣伝していますが、クリスマスの本当の意味や、それから生じたプレゼントを贈りあうことやディナーの食卓を楽しく囲む意味は、人々がお互いに愛をわかちあうためと云うことを、親たちが子供に語れるようになったら大したもの。ドンチャン騒ぎでクリスチャンでない人々に普及したクリスマスも、落着いて本来の意味に近づくためのきっかけとなることを祈りたい。

教会教育主要目録

1月号

エピファニーをめぐって　新見　宏
カリキュラム第3年度の「教会」という
主題をどう展開するか　山北多喜彦
これからの指導者　アルヴィン・
——交りの中の価値——　クーパー
キリスト教教育の背景としての神学3
=トレルチ=　青山学院大学キリスト教
教育研究所
クリスチャン・ホームの正月行事
岩村　信二
時を生かそう　山内　六郎
シュヴァイツァ博士よりの手紙

2月号　奇跡をどう教えるか

奇跡ってにんじゅつのこと？
奇跡記述の理解の仕方　馬場　嘉市
奇跡の問題　竹井　一夫
奇跡物語の取扱について　関田　寛雄
キリスト教教育の背景としての神学4
=ヘルマン・ヴレーデ・ハルナック=
青山学院大学キリスト教教育研究所
婚約について　岩村　信二
舌の訓練　山内　六郎

3月号　今日の教会教育の問題と明日への課題

教会教育を解剖する　座談会
山北多喜彦・西原勇・堀江光児
姉川四十二・平田甫・高木彰
CSの現状と明日への課題
教会学校の礼拝をめぐって　伊藤　朗
「教会学校はつまらない」か　飯沢　忠
現実をふまえつつ明日への希望を　水野　績
牧会に秘訣はない　R・ヤングダール
分級はこうして　G・ハーヴェー
キリスト教教育の背景としての神学5
=アングロサクソン系の神学者=
青山学院大学キリスト教教育研究所
クリスチャンホームの世俗化　岩村　信二
十字架をめぐって　山内　六郎

4月号　教会の本質と動向

教会の本質
世界教会運動の諸問題
ランドルフ・ミラー著「聖書神学とキリスト教教育」の紹介　安村　三郎
子を生む責任　岩村　信二
キリスト者の成長　山内　六郎

5月号　一七才をどう指導するか

若い世代とともに　池谷　敏雄
現代の青少年　山本　晴雄
ジャズと中・高生　上　良康
嵐の中のティーン・エイジャー　水野　正己
福音とビート族　w・カークランド
未亡人の生き方　岩村　信二
聖霊をうける　山内　六郎
どうして彼女らが聖書に興味をもつようになったか

6月号　激動する時代におけるキリスト教教育

激動する日本の教育と教会学校
社会運動から見る
キリスト教教育のあり方　工藤　英一
この時代における教会学校の課題
岡村　正二
嬰児科を作ろう　岩村　信二
まことの喜び　山内　六郎

7月号　夏こそキリスト教教育の時

夏を活かせ　西田　進
—アメリカ・キャンプの思い出から—
キリストを家庭へ　中川　朝江
生と死の不条理　岩村　信二
神の摂理がわかるために　山内　六郎

8月号　キリスト教教育と科学の問題

信じる？信じない？
キリスト教に対する疑問に生物学者の立場からの一つの答え　矢頭　献一
「聖書と科学の矛盾」にこたえて　野村　実
デイトのエチケット　岩村　信二
地の塩　山内　六郎

9月号　教会の教育的使命

教会の教育的使命　ランドルフ・ミラー
◇教会におけるキリスト教教育
◇牧会区全域へのキリスト教教育計画
老人の問題　岩村　信二
家庭教育と両親　山内　六郎

10月号　教会の教育的使命2

日曜学校と牧会区との関係　R・ミラー
日本における児童の発達　津守　真
嫁と姑の言い分　岩村　信二
上にあるものを求めよ　山内　六郎
原生林の中に日本館を
対談　高橋　功・外崎長三郎

11月号　聖書における教会

聖書における教会　R・ミラー
聖書の真理にてらす今日の教会の問題
一致とは？
教会の一致に関する青年の主張
二組でお茶を　岩村　信二
神に満たされよう　山内　六郎

12月号　元クリスチャンは何故多い

（クリスマス説教）
キリストの栄光　山谷　省吾
なぜ信者が脱落するか
私は一〇の理由を数えた　島村　亀鶴
元クリスチャンは何故多い　塚本　旦治
子供たちは劇活動から学ぶ
ジェラルディ・B・シックス
家庭クリスマスのために　岩村　信二
マリヤに学ぶ　山内　六郎

この外、毎月号に綜合制カリキュラムによる「礼拝説教」「聖書研究のための毎週の教案」「信徒学級」が掲載されています。

「礼拝説教」
1月—3月　大和田　功
4月—7月　青山　四郎
8月—12月　大和田　功

「聖書研究のための教案」
1月—3月　入江　義伸
4月—12月　桜井　一

「信徒学級」
1月—3月　桜井　一
4月—7月　滝沢　陽一
8月—11月　岸　千年

昭和二十八年八月十日第三種郵便物認可
昭和三十六年十二月一日発行
発行人 山北多喜彦
印刷所 精文堂印刷株式会社

教会教育 第一〇一号

定価五〇円（〒共）
半年分 三〇〇円
一年分 五五〇円

発行所
東京都中央区銀座四の二
日本基督教協議会 教会学校部
振替東京九八七一三番